

福岡市埋蔵文化財調査報告書第931集

山王遺跡3

— 第4次調査報告 —

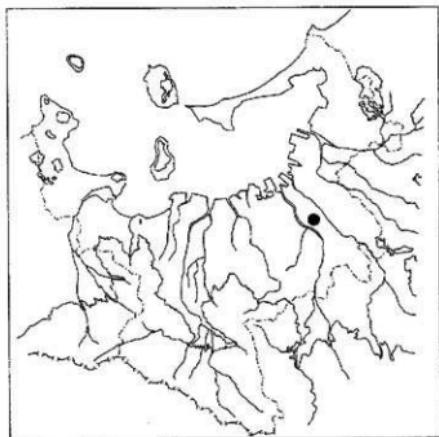
2007

福岡市教育委員会

山王遺跡3

—第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第931集



調査番号 0571
遺跡略号 HEM-4

2007

福岡市教育委員会

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には豊かな自然と多くの遺跡が残されています。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな生活環境を作り出しています。私たちはこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、さまざまな形で遺跡の保護・活用に取り組んでいます。

その一方で、最近の都市の発展により新しい開発事業が数多く手がけられ、そのために重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。本市ではこれらの遺跡については事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は博多区山王二丁目地内における山王遺跡群第4次調査の成果を報告するものです。この調査により、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居跡など当時の集落に関わる遺構を確認することができ、この地域での新たな資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料としてご活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのご協力を頂いた、株式会社コマーシャル・アート、イーの皆様をはじめ関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成 19年 3月 30日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　　言

- 本書は共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が平成18年2月15日から平成18年3月31日にかけて行った山王遺跡第4次調査の調査報告書である。
- 本書に掲載した遺構実測図の作成は大塚紀宣が主に行い、石田千鶴、開端一憲（東京大学）の協力を得た。遺物実測図の作成、写真撮影、挿図の整図は大塚が行った。
- 本書に掲載した座標は世界測地系を使用している。また本書の挿図内で用いた方位は磁北で、真北から $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
- 本書で使用した遺構の呼称は、竪穴住居をSC、溝状遺構をSD、井戸をSE、土坑・貯蔵穴をSK、柱穴・ピットをSPと略号化している。
- 遺構・遺物番号は基本的に各々通し番号で、重複はない。
- 本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆・編集は大塚が行った。

遺跡調査番号	0571		遺跡略号	HEM-4	
地番	博多区山王2丁目37番、38-2番		分布地図番号	東光寺 37	
開発面積	1275.57m ²	調査対象面積	449.3m ²	調査面積	449.3m ²
調査期間	平成18年2月15日～3月31日				

目 次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 発掘調査の組織.....	1
第2章 調査の概要.....	3
1. 積穴住居 (SC)	3
2. 土坑・貯蔵穴 (SK)	22
3. 構造遺構 (SD)	26
4. 井戸 (SE)	28
第3章 小結.....	32

挿図目次

Fig.1 調査地点位置図 (1/25,000)	2
Fig.2 調査地点位置図 (1/2,000)	2
Fig.3 調査区全体図 1 (1/100)	4
Fig.4 調査区全体図2 (1/100)	5
Fig.5 SC-003遺構実測図 (1/50)	6
Fig.6 SC-003出土遺物実測図 (1/1・1/3)	6
Fig.7 SC-004遺構実測図 (1/50)	7
Fig.8 SC-005遺構実測図 (1/50)	7
Fig.9 SC-004出土遺物実測図 (1/3)	8
Fig.10 SC-005出土遺物実測図 (1/3・1/4)	9
Fig.11 SC-006出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig.12 SC-006遺構実測図 (1/50)	9
Fig.13 SC-009 (北) 遺構実測図 (1/50)	10
Fig.14 SC-009 (南) 遺構実測図 (1/50)	11
Fig.15 SC-018遺構実測図 (1/50)	12
Fig.16 SC-018出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig.17 SC-019遺構実測図 (1/50)	13
Fig.18 SC-019出土遺物実測図 (1/3)	14
Fig.19 SC-021遺構実測図 (1/50)	15
Fig.20 SC-023遺構実測図 (1/50)	15
Fig.21 SC-021出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig.22 SC-024遺構実測図 (1/50)	17
Fig.23 SC-024出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig.24 SC-025遺構実測図 (1/50)	18
Fig.25 SC-025出土遺物実測図 (1/3)	18
Fig.26 SC-027遺構実測図 (1/50)	19
Fig.27 SC-027出土遺物実測図 (1/1・1/3)	20
Fig.28 SC-028遺構実測図 (1/50)	21
Fig.29 SC-030遺構実測図 (1/50)	22

Fig.31	SK-007遺構実測図 (1/40)	23
Fig.32	SK-008遺構実測図 (1/40)	23
Fig.33	SK-007-008-014出土遺物実測図 (1/3)	24
Fig.34	SK-010-014遺構実測図 (1/40)	24
Fig.35	SK-010出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig.36	SK-032遺構実測図 (1/40)	25
Fig.37	SK-032出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig.38	SD-001-002出土遺物実測図 (1/3)	26
Fig.39	SD-020出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig.40	SE-029遺構実測図 (1/40)	28
Fig.41	SE-029出土遺物実測図1 (1/3)	29
Fig.42	SE-029出土遺物実測図2 (1/3)	30
Fig.43	SE-029出土遺物実測図3 (1/3)	31

図版目次

- 図版1 (1) SC-003 (西から)
 (2) SC-004 (北から)
 (3) SC-005 (南から)
- 図版2 (1) 調査区西半全景 (南から)
 (2) SC-006 (南から)
- 図版3 (1) 調査区東半全景 (南から)
 (2) SC-018 (南から)
- 図版4 (1) SC-019 (南から)
 (2) SC-021 (南から)
 (3) SC-023 (南から)
- 図版5 (1) SC-024 (南から)
 (2) SC-030付近 (南から)
 (3) SK-007 (西から)
- 図版6 (1) SK-010 (東から)
 (2) SK-032 (南から)
 (3) SD-020 (南から)
- 図版7 (1) SE-029土器出土状況1 (北東から)
 (2) SE-029土器出土状況2 (南東から)
 (3) SE-029完掘状況 (南東から)
- 図版8 出土遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

2005年（平成17年）11月11日付けで、有限会社藤島興産 代表取締役 藤島健一氏より福岡市博多区山王2丁目37番、38-2番地内における共同住宅建設にともなう埋蔵文化財の有無についての照会が申請された。これをうけて埋蔵文化財課（当時）では、申請地が周知の遺跡である山王遺跡の範囲内に位置することから、埋蔵文化財課では関係者と協議を重ねた結果、建物の建築予定部分については建物基礎が遺構面に影響を与えることから、申請地のうち建物建設によって影響を受ける範囲について発掘調査による記録保存を図ることとし、平成18年2月から3月にかけて発掘調査を実施した。

調査はまず対象範囲の表土を除去して遺構面を検出し、遺構を掘削する手順で進められた。調査は2月15日より重機による表土除去から開始し、作業員による遺構検出・遺構掘削、遺構測量図の作成、写真撮影を行い、3月31日に調査を終了した。

発掘調査の実施にあたっては、地権者の有限会社藤島興産、建築主で今回の発掘の事業主体である株式会社コマーシャル・アールイーをはじめ関係者の方々に多大なご理解とご協力を頂きました。ここに記して感謝いたします。

2. 発掘調査の組織

事業主体 株式会社コマーシャル・アールイー

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第1課） 課長 山口謙治

庶務担当 文化財整備課（現文化財管理課） 鈴木由喜

事前審査 埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第1課）事前審査係 本田浩二郎

調査担当 埋蔵文化財課（当時） 大塚紀宣

調査作業 石川洋子 伊藤美伸 乾俊夫 桑原美津子 柴田博 田中トミ子 濱地静子 林厚子
播磨千恵子 吹春憲治 北條こず江 水野由美子 水田ミヨ子 杉村百合子 酒井康恵

米倉國弘 村井藤枝 大崎宏之 村山巳代子 増田ゆかり 銀山治子

整理作業 横原明美 古城恭子

第2章 調査の概要

遺跡周辺の歴史的環境などについては、これまでの比恵遺跡群、山王遺跡の報告書をご参照いただきたい。

1. 竪穴住居（SC）

SC-003 (Fig.5)

調査区南西側で検出された段差と、平行する溝を住居の一部ととらえ、SC-003とする。住居住軸が北東-南西方向でSC-004にはば平行な向きであることや、北側の壁際に壁溝を備えた住居であるとい

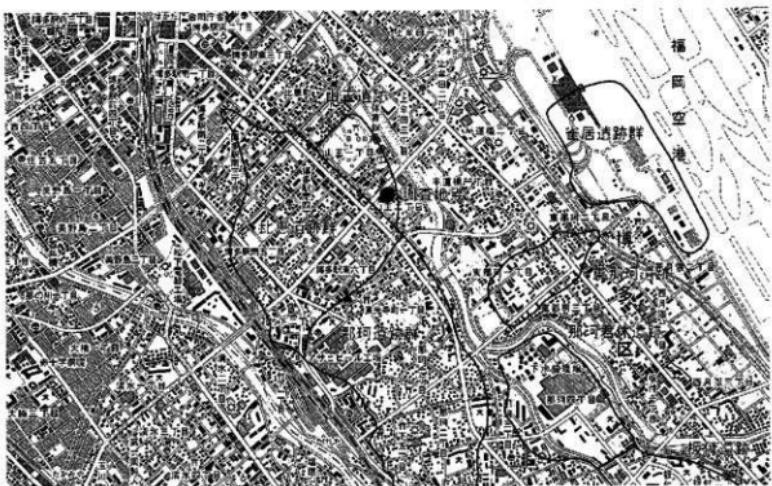


Fig. 1 調査地点位置図 (1/25,000)

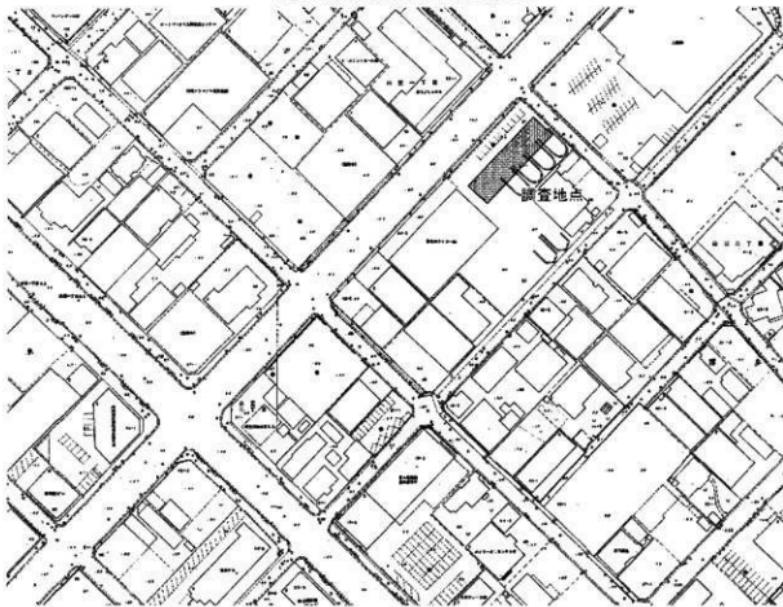


Fig. 2 調査地点位置図 (1/2,000)

うことの他には、住居の規模や構造など具体的内容は不明である。住居内の柱穴P-3から青銅製の鍔先が出土したが、この柱穴が住居に本来伴うものかどうかも不明である。P-1から西新町式の甕が出土しているが、この柱穴がSC-003本体の掘方よりも後出することが確認されている。

出土遺物 (Fig.6) 1は青銅製の鍔先の破片。断面はU字形で、上部は遺物本来の側面が確認できる。下部は緩くカーブし、刃部へとつながるとみられる。2は石包丁で全体の2/3程度遺存する。基部は平坦で、刃部は三角形に近い円弧に研ぎ出される。頁岩製と見られる。3はガラス製の小玉。長さ4mm、直径4mm。濃い青色を呈し、透明感をもつ。4は変形土器の口縁部付近破片。口径22.6cm。口縁は外側に直線的に開き、端部は面取りする。胴部は肩が張らず、頸部の屈曲は明瞭である。器面調整は外面が口縁部から胴部にかけて縦方向ハケ目、内面は口縁部が横ナデ、胴部が縦方向ハケ目。SC-004 (Fig.7)

調査区南西側で検出された方形の竪穴住居で、北側をSC-005に切られる。東西方向を住居主軸ととらえた場合、主軸方向長は5.5m前後と推定される。遺構北側が調査区外に及ぶため、遺構の全体像は不明だが、ベッド状遺構が東西2面に付設されている。床面からベッド状遺構までの高さは約15cmである。南側壁中央に壁際土坑が位置する。壁際土坑の深さは床面から20cmほどである。また床面中央と見られる位置に炉跡が位置している。炉床は住居主軸方向に長軸をもつ楕円形で、長軸長80cm、幅50cm、深さ10cmの浅い皿状の土坑で、覆土に炭化物や焼土を多く含む。この炉を住居中心とした場合、住居の幅は4m前後と推定される。住居内にピットが7基確認できるが、主柱穴は特定できない。

出土遺物 (Fig.9) 5は二重口縁壺の口縁部～頸部付近の破片。口径16.8cm。口縁部は内傾しながら短く立ち上がり、端部は丸く仕上げる。胴部と頸部の境界に断面三角形突帯を1条貼付する。器面調整は口縁部付近が横ナデ、頸部外面は縦方向ハケ目、頸部内面は横方向のハケ目を施す。6は二重口縁壺の口縁部から頸部にかけての破片。口径19.0cm。口縁部は頸部から鋭く屈曲して外反しながら内傾する。頸部は細くすぼまる。風化のため内外面とも剥落が著しく、器面調整は不明で丹塗の有無も判明できない。7は壺形土器。口径13.2cm。口縁部は短く外反し、端部は丸く仕上げる。頸部の屈曲は明瞭で、胴部は最大径が胴部中位下に位置して全体に下ぶくれの感を呈する。内外面とも風化が著しく調整は不明。胎土が在地の土器とは若干異なる。8は鉢形土器で口径22.5cm。口縁は外側に開き、口縁端部は横ナデで面取りする。胴部は半球形で底部はレンズ状を呈する。器面調整は外面が口縁部から胴部まで縦方向ハケ目、底部もハケ目を施す。内面が口縁部は横ナデ、胴部は横方向のケズリ。9は甕の口縁部～胴部上位破片。口径20.8cm。口縁部は軽く外湾し、端部は丸める。頸部の屈曲は緩く、胴部はなで肩を呈する。口縁部から胴部にかけて外面には縦方向のハケ目痕、口縁部内面に横方向ハケ目が残る。10は甕口縁部の破片と見られる。口径17.6cm。口縁部は直線的に大きく開き、端部は面取りしていたと見られる。内外面とも風化により調整不明。11は變形土器。口径19.2cm。口縁部はく字形に屈曲して外湾し、端部は面取りする。胴部外面に縦方向ハケ目、内面に横方向ハケ目の痕跡が見られるが、器面の大部分は剥落が進む。12は高杯の口縁部破片。口径は30.4cmで復元したが、破片の遺存状況が悪く、復元口径値の信用度は低い。口縁は体部から屈曲して外反し、端部は現況で丸まる。内外面とも著しい風化のため、調整など器面の細かい情報は失われている。13・14は大型の變形土器の破片で、同一個体とみられる。13は底部付近破片。底径13.4cmを計る。底部はレンズ状を呈し、胴部は底部から外湾気味に立ち上がる。外面は縦方向ハケ目で、底面にもハケ目を施す。内面はナデ。14は胴部破片で突帯部分を含む。器壁の厚さは1.0cm程度で、甕棺並みである。突帯は断面コ字形で刻目を施す。調整は外面突帯部分は横ナデ、その他の部分は縦方

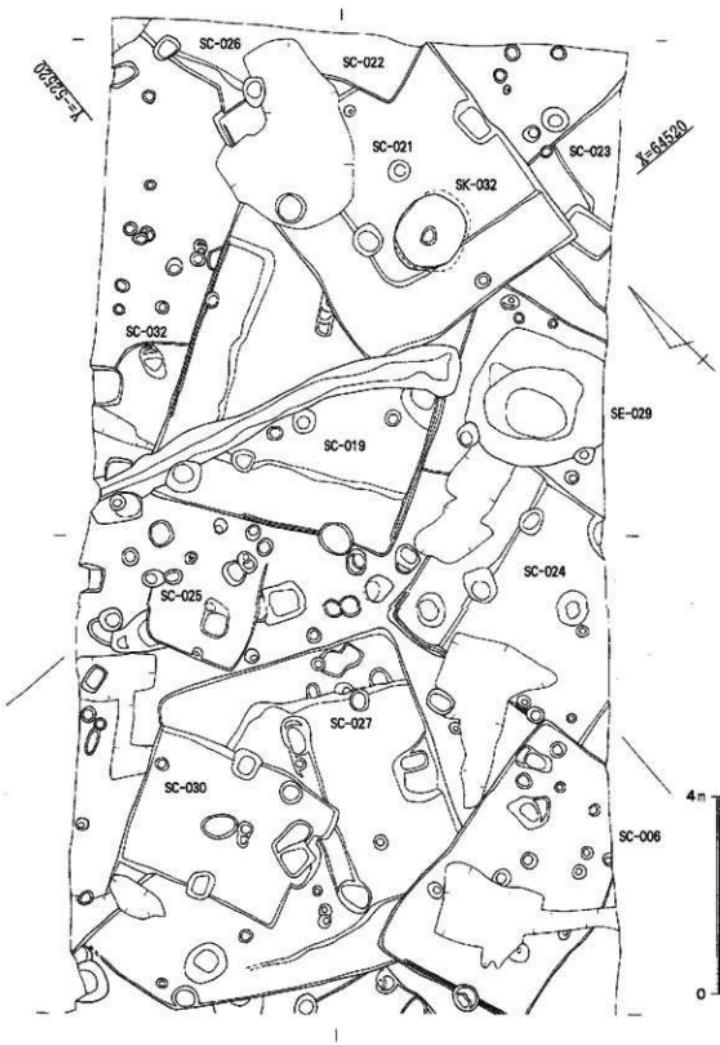


Fig. 3 調査区全体図1 (1/100)

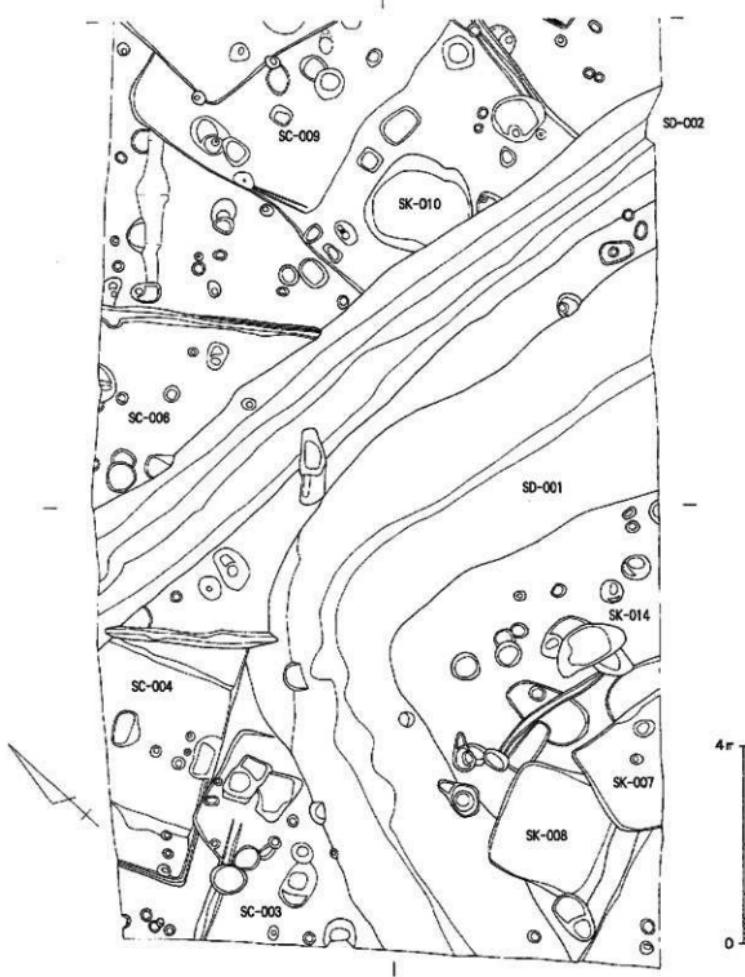


Fig.4 調査区全体図2 (1/100)

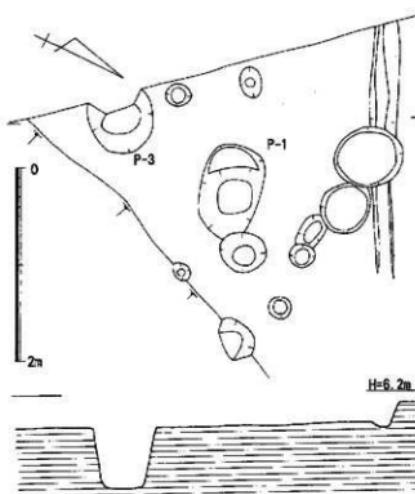


Fig. 5 SC-003造構実測図 (1/50)

器壁も本来の形状を留める部分は少ない。17は変形上器。口径17.8cm。口縁部は緩く外反しながら開き、端部は現状で丸まる。頸部の屈曲は明瞭で、胸部は球形を呈する。外面に縱方向ハケ目の痕跡がわずかに残るが、内外面とも風化が著しく、調整が不明な部分が多い。

SC-006 (Fig.12)

調査区東側で検出された長方形の竪穴住居。SC-024・027を切る。住居南東側の一部は調査区外に及ぶ。また住居西側の多くは攪乱によって切られている。長軸方向は東西方向で、長軸方向長5.6m、幅3.4mを測る。西壁と東壁の壁際に壁溝が確認される。住居の主柱穴は4本柱とみられるが、柱穴を特定することは困難で、図中のP1～P4がその候補として最も適当と考えられる。床面上に明瞭なが床は検出できなかった。

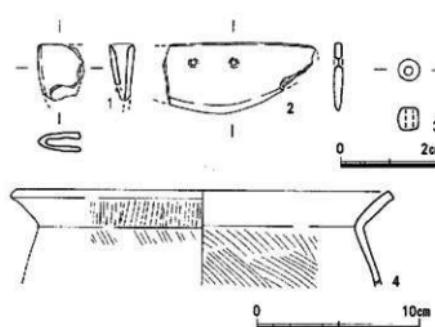


Fig. 6 SC-003出土遺物素描図 (1/3・3は1/1)

向ハケ目、内面は横方向ハケ目を施すが、
破片下部は風化が著しく、調整は不明瞭。
SC-005 (Fig.8)

調査区南西側で検出された方形の竪穴住居で、住居中央をSD-002に、住居南東側をSD-001に切られ、住居の遺存状況としては良くない。南北の壁際に幅広の壁溝を持ち、南東側中央に壁際土坑と見られる土坑が位置する。住居内に位置するピットのうち、主柱穴を構成するものは特定できず、住居の柱数も確定できない。また、炉跡と見られる焼土集積や、ベッド状遺構もない。出土遺物 (Fig.10) 15は甕口縁部の破片。口径18.2cm。口縁部は直線的に開き、端部は現況で丸まる内外面とも風化が進み、器面調整は不明。16は菱形土器。口径13.0cm。口縁部は強く外反する。

内外面とも風化による器壁の剥落が著しく、
口径17.8cm。口縁部は緩く外反しながら
球形を呈する。外面に縦方向ハケ目の痕跡
的な部分が多い。

出土遺物 (Fig.11)

18は須恵器坏の破片。口径10.6cm。受け部の立ち上がりは内傾しながら高く立ち上がる。体部と受け部は回転模ナデで成形

SC-009 (Fig.13 • 14)

調査区中央で検出された方形の堅穴住居と見られる遺構で少なくとも2基の住居が切り合ったものであることが確認できたが、調査時には両者を1基の住居と誤認し、床面付近の状況を見て両者の位置関係をはじめて認識した。したがって両者の前後関係も不明である。以下、SC-009（北）と

SC-009（南）と分けて説明していく。

SC-009（北）は主軸を東西方向にとる長方形の竪穴住居とみられ、主軸長5.6m、幅4.4m。住居の北西側をSC-028に切られている。住居内にベッド状遺構や炉跡などの設備は見られない。また主柱穴も特定できない。住居南西隅の部分で壁溝が確認できる。住居南側は床面付近でSC-009（南）よりも1cm程度深く掘り込んでいたため、その線を住居南壁と見なした。

SC-009（南）は主軸方向をほぼ正確に東西方向にとる長方形の竪穴住居で、主軸方向長5.6m。住居南側をSD-002に切られ、

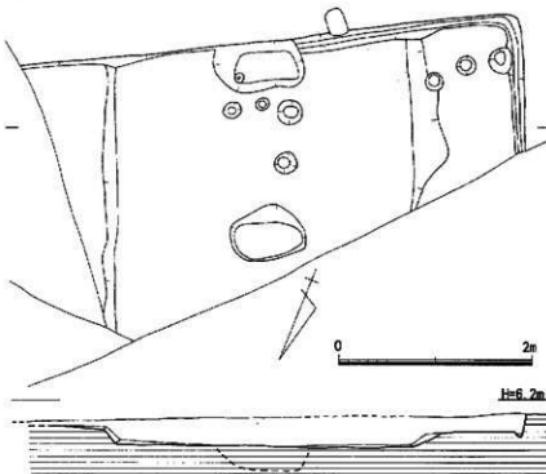


Fig. 7 SC-004遺物実測図 (1/50)

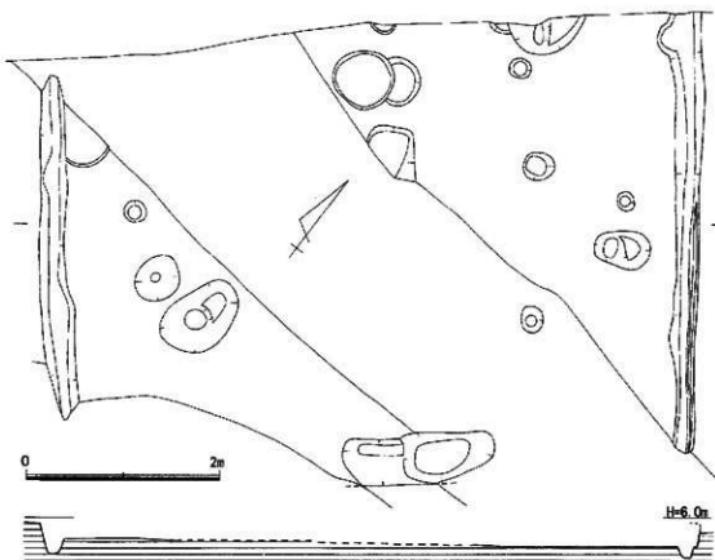


Fig. 8 SC-005遺物実測図 (1/50)

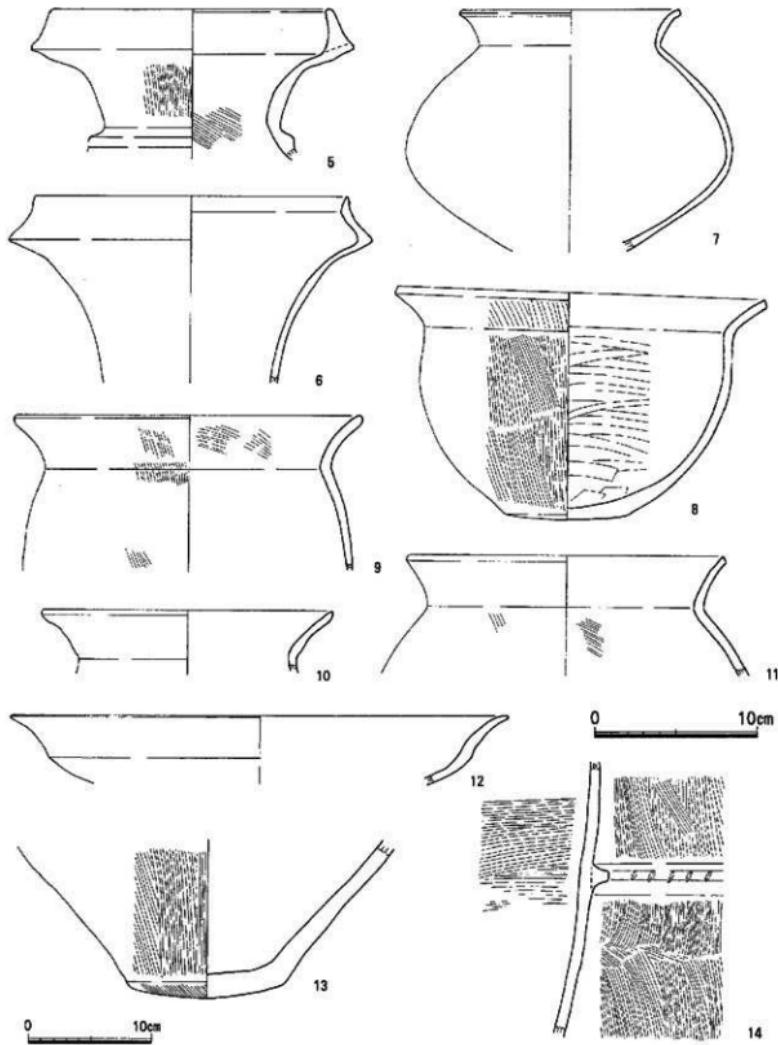


Fig. 9 SC-004出土遺物実測図 (1/3・12~14は1/4)

南北方向長は不明である。東側壁際に壁溝を持つ。住居中央に炉床とみられる東西方向に主軸を持つ長方形の土坑があるが、土坑内から炭化物や焼土は少量しか検出されていない。また主柱穴も特定できない。

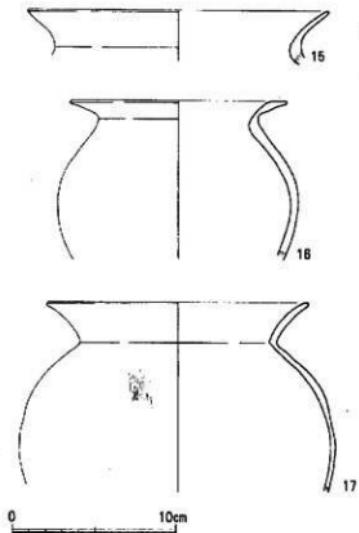


Fig. 10 SC-005出土遺物実測図 (1/3)

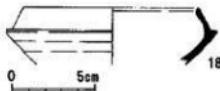


Fig. 11 SC-006出土遺物
実測図 (1/3)

出土遺物 南北2基の住居内から出土した土器はいずれも細片で図示困難である。

SC-018 (Fig.15)
調査区北東側で検出さ

れた方形の竪穴住居で、東側は調査区外に及び、住居中央部分はSE-029と重複するなど、遺構の遺存状態は悪い。検出面から床面までの深さは15cm程度で、ごく浅い皿状を呈する。住居主軸は北西・南東方向により、住居幅は4.2mを測る。床面上からはピットなどは確認できなかった。

出土遺物 (Fig.16) 調査時点では、住居と重複するSE-029の遺物が混入している可能性がある。19は二重口縁壺。口径35.4cmを計る。口縁は頸部から開き気味に立ち上がり、端部は丸める。頸部は強く外湾する。20は大型の二重口縁壺。口径33.8cm。口縁部は緩く湾曲しながら外反し、端部は面取りする。頸部と口縁部の境界の屈曲部には下方に垂下する粘土帯を貼付している。風化のため内外面とも摩耗が著しく、器面調整は不明。21は壺底部。底径7.2cm。底面はわずかに

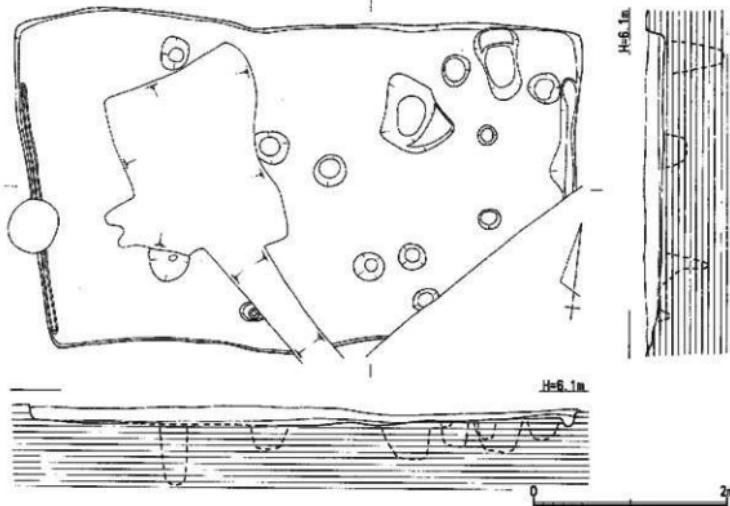


Fig. 12 SC-006遺構実測図 (1/50)

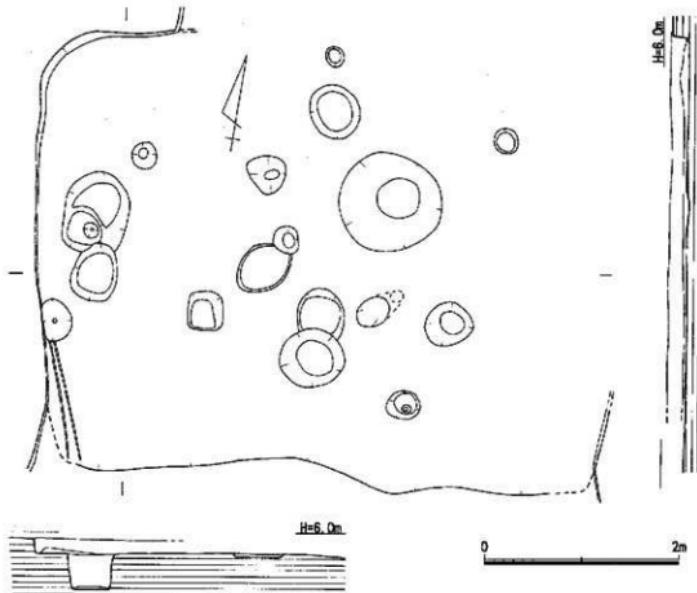


Fig.13 SC-009 (北) 速描実測図 (1/50)

上げ底を呈する。胴部外面に縦方向ハケ目の痕跡が残り、底部付近の内面には指圧痕が残る。

SC-019 (Fig.17)

調査区北側で検出した方形の竪穴住居で、中央をSD-020に切られるが、調査時点ではSC-019の掘削を先行した。また住居北東側はSC-021に切られる。住居の主軸は北東ー南西方向に向き、主軸方向長は7.2mと推定される。幅は5.4mを測る。北西側と南西側にベッド状造構を持ち、床面とベッド状造構の比高差は15cm程度である。ベッド状造構は住居北側のコーナー部分で切れている。柱穴の位置からみてベッド状造構は北東側にもあったと考えられる。南東側壁の中央部分はSD-020で切られているが、この位置に本来壁際土坑があったと考えられる。床面上の住居主軸上に2本の柱穴が確認され、これが住居の主柱穴とみられる。北側の柱穴は階段状の段差をもつ。床面上に明瞭な炉の痕跡は確認できなかった。

出土遺物 (Fig.18)

22は変形土器で口径13.4cm。口縁部は緩く開き、端部は丸める。口縁外面には整形時の指圧痕が残る。胴部外面は横方向ハケ目で調整し、内面はナデで、胴部内面には粘土の接合痕が残る。23は変形土器。口縁は外側に緩く開き、端部は丸めて仕上げる。頸部と胴部との屈曲は不明瞭である。胴部は横に張らない。外面は胴部が縦方向ハケ目、口縁部はナデで、内面は口縁部が横ハケ、胴部がナデ。24は変形土器で口径14.4cm。内外面とも風化が進み、調整が判明する部分はない。25は変形土器で口径14.4cmと、小型である。内外面とも風化のため調整が判明する部分はない。26は変形土器で口径19.6cm。口縁は短く外側に立ち上がり、口縁端部は丸めて仕上げる。頸部の屈曲は緩い。器面調

整は内外面ともナデまたは横ナデで、内面に指圧痕が残る。27は大型の壺形土器で全体に厚手の作りである。口径24.2cm、口縁部は外側に張り出し、口縁上面は外傾する。口縁部付近は内外面とも横ナデ。28は弥生時代中期の変形土器。本来の造構の時期に伴うものではなく、埋没時の混入によるものとみられる。口径31.1cm、口縁は胴部からL字形に屈曲して突出し、口縁上面は

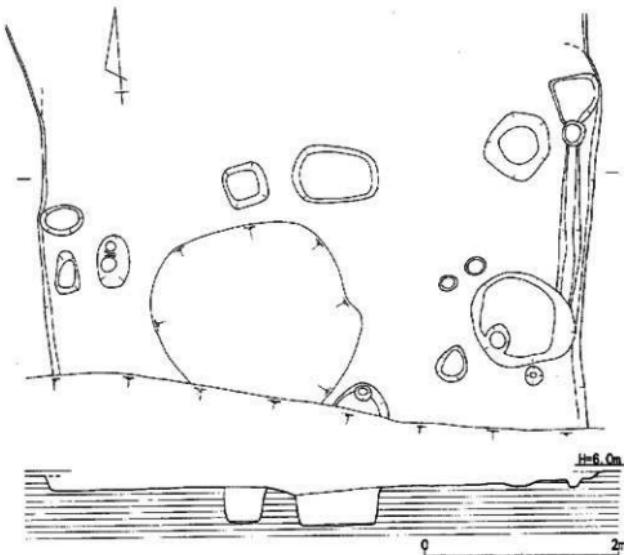


Fig. 14 SC-009 (南) 造構実測図 (1/50)

外傾する。胴部最大径は胴部最上位に位置する。風化のため外面は調整不明。内面はナデ調整。29は壺形土器。口径15.6cm。頸部は細く締まり、口縁部は緩く開いて端部は丸める。器面調整は口縁部から頸部にかけて縦方向ハケ目、胴部外面は縦方向ハケ目で、胴部中位に縦方向の平行タタキ目が残る。胴部内面は縦方向のハケ目で一部指圧痕が残る。口縁部内面は剥落のため調整不明。30は鉢形土器ではほぼ完形。口径11.4cm、底径2.2cm。口縁端部は横ナデで丸める。体部は直線的に開く。外面に縦方向のハケ目、内面に横方向ハケ目の痕跡が残り、外面片側に黒斑が見られる。31は鉢形土器で底部を欠く。口径12.8cm。口縁部は直立し、端部は丸める。内外面とも風化が著しく、器面調整は不明。32は台付鉢の脚部で底径12.0cm。脚部は直線的に開き、端部は丸めて仕上げる。外面はナデ、内面は主に縦方向ハケ目。破片上面に鉢底部部分が遺存する。33は小型の長頸壺で完形。口径7.0cm、器高12.2cm、底径5.0cm。頸部は外反しながら立ち上がる。肩部は扁球形を呈する。底部はレンズ状を呈する。風化が進み、内外面とも調整は不明。34は高壺の口縁部破片。口径22.6cm。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸める。口縁部と坏部の境界の屈曲部は突帯状に作り出し、細線状の刻目を施す。内外面とも風化のため器壁の剥落が著しく、調整不明。35は弥生中期の変形土器。底径8.2cm。底部は平底で、胴部は底部から外反しながら立ち上がる。胴部外面は縦方向ハケ目調整を行う。内面は剥落が著しく調整不明。28と同様に住居埋没時の混入と考えられる。

36・37は石包丁。36は33と同様にSP-199から出土したほぼ完形の石包丁である。全長10.3cm、最大幅4.0cm、厚さ0.6cm。基部は直線的で、両端に丸みをもつ。刃部は幅広のU字形で、基部以外の3辺に刃を研ぎ出す。全体では楕円形に近い形を呈する。刃部の一部に摩耗の著しい部分があり、使用に伴う使い減りとみられる。玄武岩製。37はほぼ完形で出土した石包丁。全長12.8cm、最大幅4.1

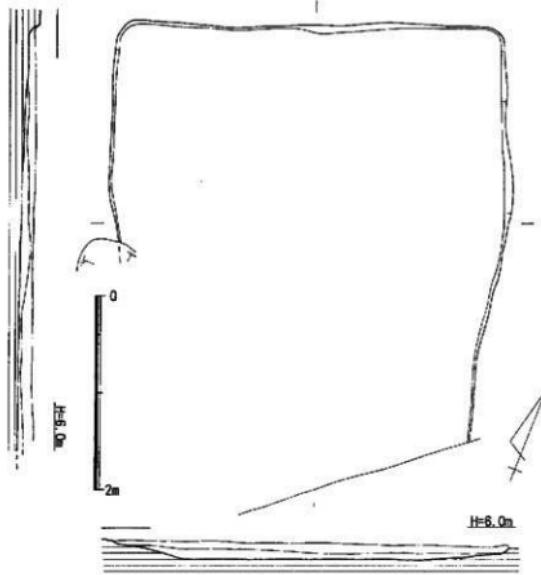


Fig. 15 SC-018遺構実測図 (1/50)

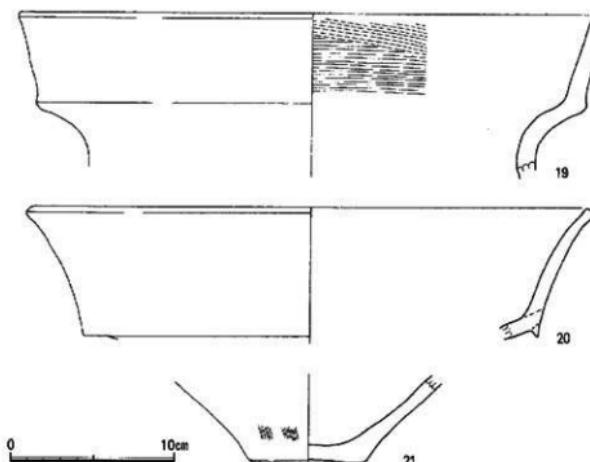


Fig. 16 SC-018出土遺物実測図 (1/3)

cm、厚さ5mm。基部は丸みを持ち、刃部は両面から同程度に研ぎ出される。刃部の一部に緩い凹みが見られ、使い減りによるものと考えられる。頁岩製とみられる。38は紡錘形の投弾。全長3.9cm、径1.9~2.2cm。SC-021 (Fig.19)

調査区北側で検出した方形の堅穴住居で、SC-019を切り、北側をSC-022に切られる。また北側の一部を搅乱に切られているが、住居全体の規模はほぼ把握できる。住居主軸はほぼ南北方向にとり、主軸方向長6.2m、幅5.0mを測る。遺構検出面から床面までの深さは約40cmである。住居内の南、西、北の3方向にベッド状遺構を付設してお

り、床面からベッド状遺構までの高さは約15cmである。またベッド状遺構のない東側壁際中央には壁際土坑が掘られており、深さは20cmである。床面中央に粘土と焼土が混在して分布する範囲があり、炉跡とみられる。焼土・粘土は平面的に広がっており、炉床に伴う掘り込みは見られない。主柱穴は、P-3が主柱穴の1本と推定されるが、炉床を挟んで残り1本は検出できなかった。SK-032の

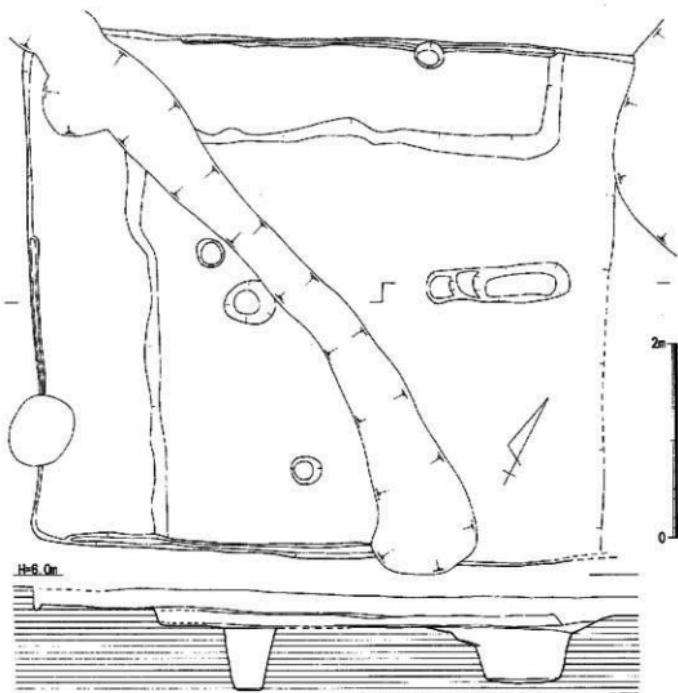


Fig. 17 SC-019遺構実測図 (1/50)

覆土に紛れて見落としたものとみられる。

出土遺物 (Fig.21) 39は二重口縁壺で口径16.0cm。口縁は直線的に内傾して短く立ち上がる。頸部は緩く外滴する。口縁部付近は横ナデ、頸部内面は縦方向ハケ目。頸部外面は風化による剥落が著しく、調整不明。40は二重口縁土器。頸部外面に縦方向ハケ目の痕跡が残り、内面に縦方向のハケ目痕跡が残るが、全体に風化により器面調整が不明な部分が多い。41は壺形土器。底径7.4cm。底部は平底で縁は丸い。胴部は底部からふくらみ気味に立ち上がる。内外面ともナデ調整。42は大型の高壺の口縁部破片と考えられる。口縁部は体部から屈曲して直立気味に立ち上がり、緩く外反して開く。風化のため、内外面とも剥落が著しく、器面調整は不明。

43～48は器台で、いずれも完形又は完形に近い状況で出土した。43は器高13.3cm。口径12.0～12.6cm、底径11.6～12.0cmで、底部のつくりが厚手になっている。口縁部と底部は外反しながら広がり、端部は丸める。外面に縦方向ハケ目、内面に横方向ハケ目の痕跡が一部残るが、全体に風化が進み、表面の磨耗が進む。44は口径12.4cm、器高17.7cm、底径13.2cm。口縁と底部の端部は面取りしていたと見られるが、風化で丸まる。外面に縦方向のハケ目、内面に指圧痕が残るが、風化による器壁の剥落のため、表面の多くの部分が調整不明である。45は口径12.6cm、器高16.6cm、底径

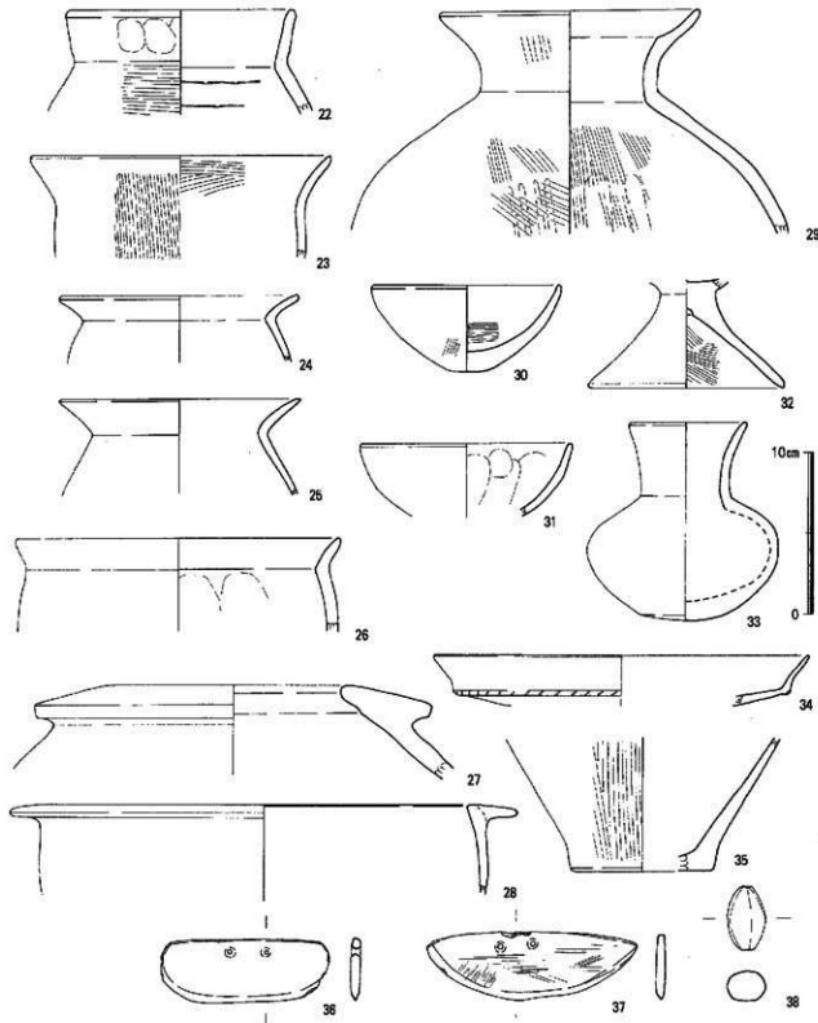


Fig. 18 SC-019出土遺物実測図 (1/3)

14.3cm。口縁と底部は外湾して広がり、端部は丸める。外面に縦方向ハケ目痕が一部に残るが、全体に風化が進み、器壁の荒れが目立つ。46は口径13.4～13.6cm、器高15.8cm、底径13.6～14.2cm。口縁部は強く外湾し、端部は風化で丸まる。胴部は緩く外側に開く筒形で、脚部は軽く外反して端部

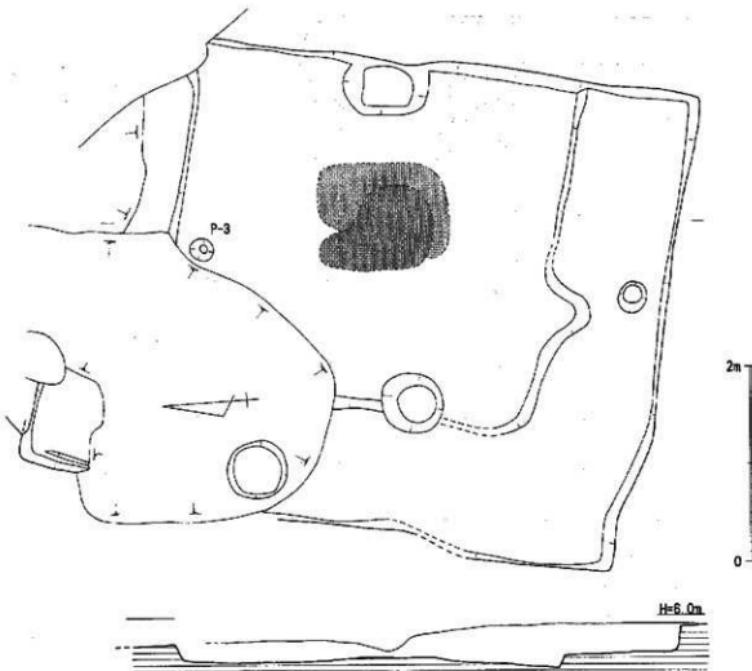


Fig. 19 SC-021 造構実測図 (1/50)

は丸まる。口縁と脚部付近は横ナデで、脚部外面は縦方向ハケ目。47は口径5.5~5.8cm、器高12.0cm、底径9.6~10.0cm。口縁は屈曲して内側に短く折れ、端部はナデで丸める。脚部は外湾し、底部は軽く外側に開く。外面の一部に縦方向ハケ目痕が残るが、内外面とも風化が著しい。48は口径5.6cm、器高11.7cm、底径9.6~9.8cm。口縁は内湾し、端部は丸める。脚部は外側に開き、端部は丸める。外面に縦方向のハケ目痕が残る他は、内外面とも風化による剥落が著しい。

49は石包丁で、全体の2/3程度遺存する。最大幅4.0cm、厚さ0.7cm。基部は平坦で、刃部は幅広のU字形を呈する。刃部は基部以外の3辺に研ぎ出されている。全体の大きさに比べ、穿孔部分の大きさが大きい。片岩製。

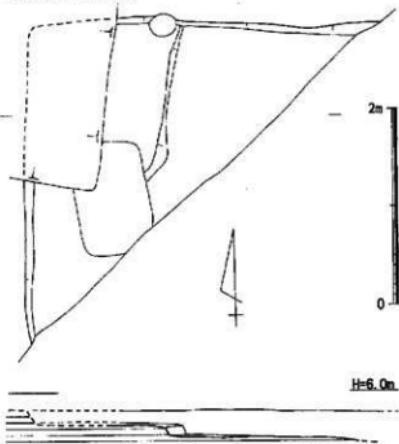


Fig. 20 SC-023 造構実測図 (1/50)

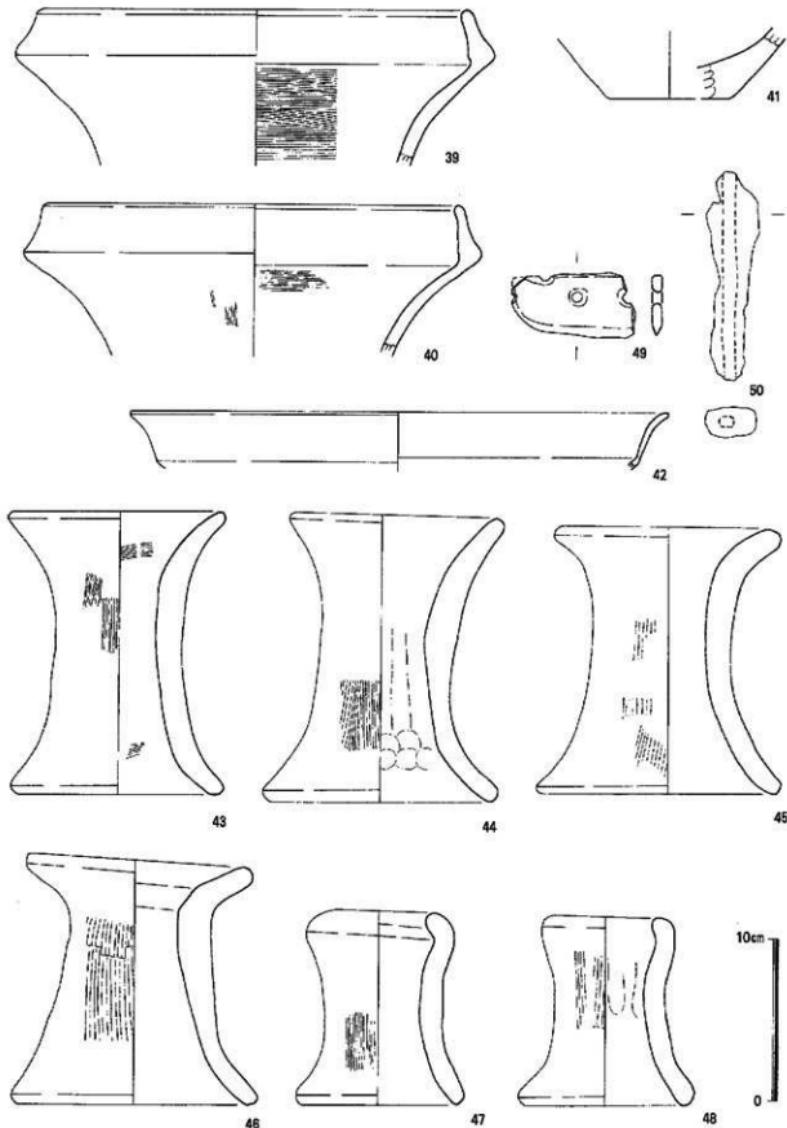


Fig.21 SC-021出土遺物実測図 (1/3)

50は鉄製品で、X線で確認したところ、棒状の製品であることが確認できた。鑿または鑿のようなもの的一部分と考えられる。鉄部分は幅約9mm、厚さ約7mm。現状では、鉄部分の周囲に錆が薄く付着する。

SC-022・26

調査区北端で検出された方形の竪穴住居の一部で、壁面の方向や床面のレベルから同一住居と判断したが、別住居の可能性もある。遺構の主軸方向は北西—南東方向と見られる。

遺構検出面からの深さは10cm前後で、遺構内にベッド状遺構や柱穴などの構造物は確認できなかった。

出土遺物 出土遺物は土器の細片が多く、図示できるものはない。

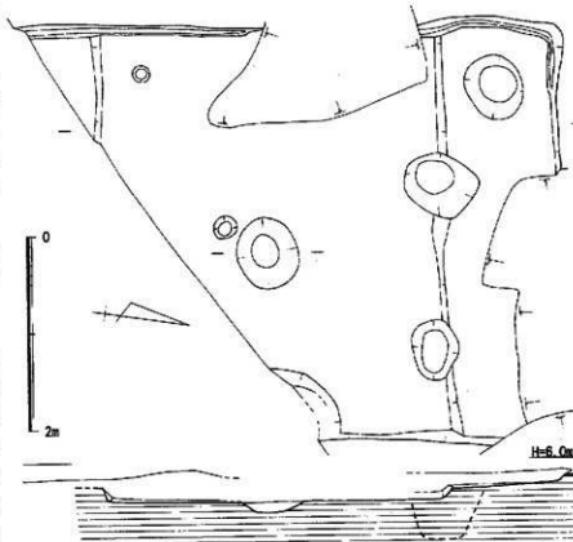
SC-023 (Fig.20)

調査区北東側で検出した方形の竪穴住居で、遺構の東半分は調査区外に及ぶ。また西側をSC-021に切られており、遺構の全体像がわかれにくくなっている。遺構検出面から床面までの深さは30cm前後を測る。遺構の主軸方向はほぼ南北に沿った向きをとる。住居西側にベッド状遺構が付くことが確認できる。床面からベッド状遺構の高さは約10cmである。炉跡、主柱穴などは調査区範囲内では確認できない。

出土遺物 遺物総量はパンケース1箱相当で、ほとんどは磨滅が進み、図示できるものはない。

SC-024(Fig.22)

調査区中央東側に位置し、住居の東側は調査区外に及び、北側は擾乱に切られる。また住居南側は一部SC-006に切られている。住居の主軸方向はほぼ南北に延び、東西幅は約4.2mである。南北両側にベッド状遺構がつく。また住居中央部には、浅い土坑があり、炉床と考えられる。また東側壁際と調査区境界付近に、壁際土坑とみられる掘り込みの一部が確認されている。主柱穴はベッド状遺構際の2本の柱穴を含む4本柱と推定される。



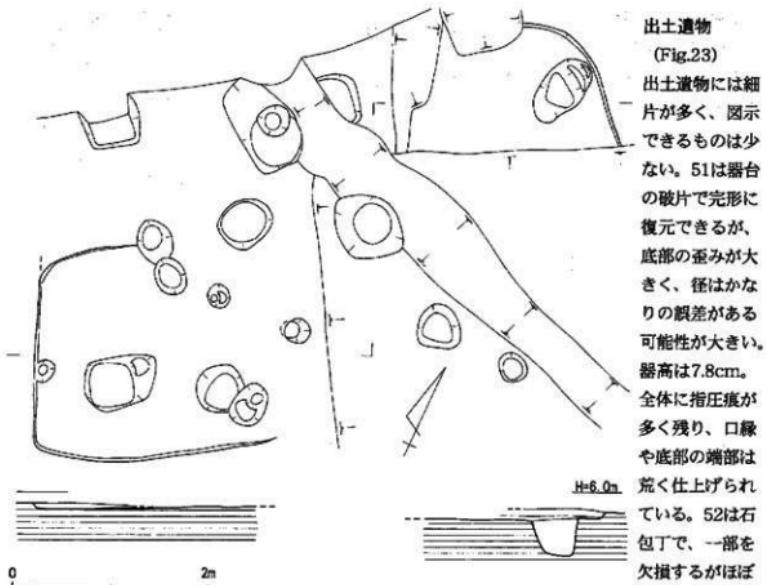


Fig. 24 SC-025遺構実測図 (1/50)

能である。全長10.0cm、最大幅4.7cm、厚さ6mm。基部はほぼ平坦で、刃部は幅広のU字形を呈し、刃部は先端の1辺のみ幅広く研ぎ出す。玄武岩製。

SC-025 (Fig.24)

調査時には2基の竪穴住居と考えていたが、遺構の配置状況が同一住居を構成するものと考えられることから、1基の長方形の竪穴住居ととらえる。長軸は北東—南西方向に向き、長軸方向長6.0m、幅3.8mと推定され、SC-006と規模や形態が近似する竪穴住居と考えられる。床面は削平によりほとんど遺存せず、検出面から床面までの深さも最も深い地点で10cm以下である。北側コーナー部分は丸味を持っているが、削平の結果本来の形状を失っている可能性が高い。南東コーナー部分はほぼ直角を保っている。竪穴住居範囲内は多くの柱穴や溝が切り合い、主柱穴の確定が非常に困難である。

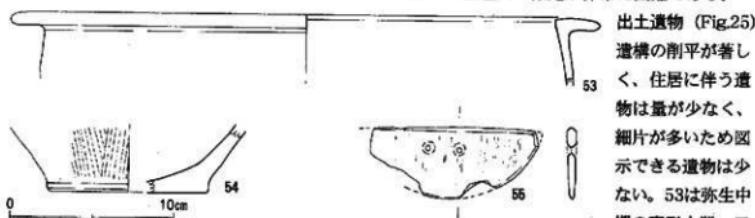


Fig. 25 SC-025出土遺物実測図 (1/3)

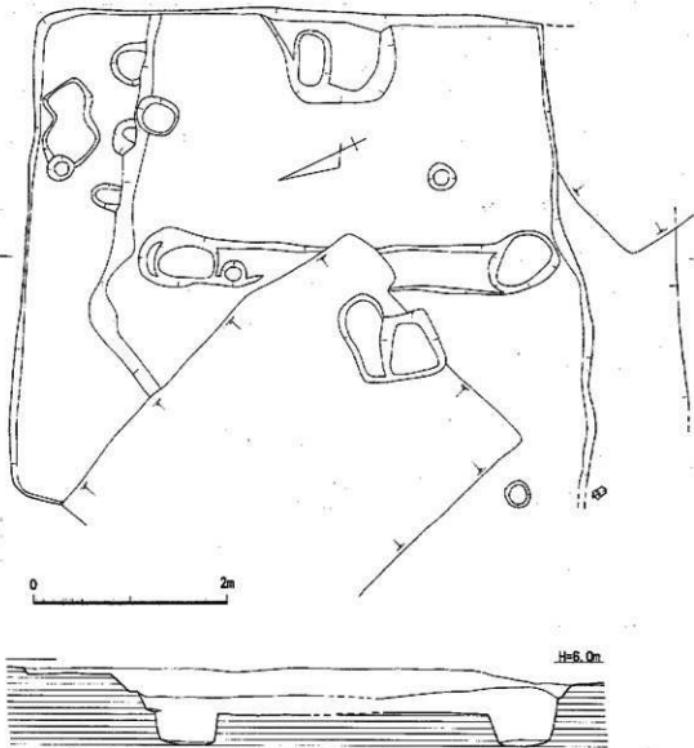


Fig. 26 SC-027遺構実測図 (1/50)

はL字形に外反する。内外面とも風化が著しく、調整は不明。54は甕形土器の底部。底径9.8cm。底部は平底で、胴部は直線的に開く。胴部外面に縦方向ハケ目を施し、内面と底面はナデ調整。53・54とも本来の住居の時期に属するものではなく、埋没時に混入したものであろう。55は石包丁で、刃部の一部などを欠損するが、遺物の全体像はほぼ確認できる。最大幅4.5cm、厚さ6mm。基部は直線的で、刃部は円弧を描いて研ぎ出し、全体で半月形を呈していたとみられる。玄武岩製。

SC-027 (Fig.26)

調査区中央で検出した方形の竪穴住居で、東側の住居壁は切り合いが混乱して把握することができなかった。住居の主軸は北東-南西方向に向き、主軸方向長6.7m、推定幅5.2m。遺構検出面からの床面までの深さ25cm前後を測る。ベッド状遺構は遺構の北側と南側に存在することが確認でき、東側にも存在した可能性がある。南側のベッドについては一部掘りすぎた箇所もある。遺構西側壁際の中央には土坑が位置している。住居中央に主軸方向の溝が掘削され、両端に柱穴が位置している。溝は断面がU字形で床面からの深さは約20cm、柱穴は径60cm程度で床面からの深さは50cmを測る。こ

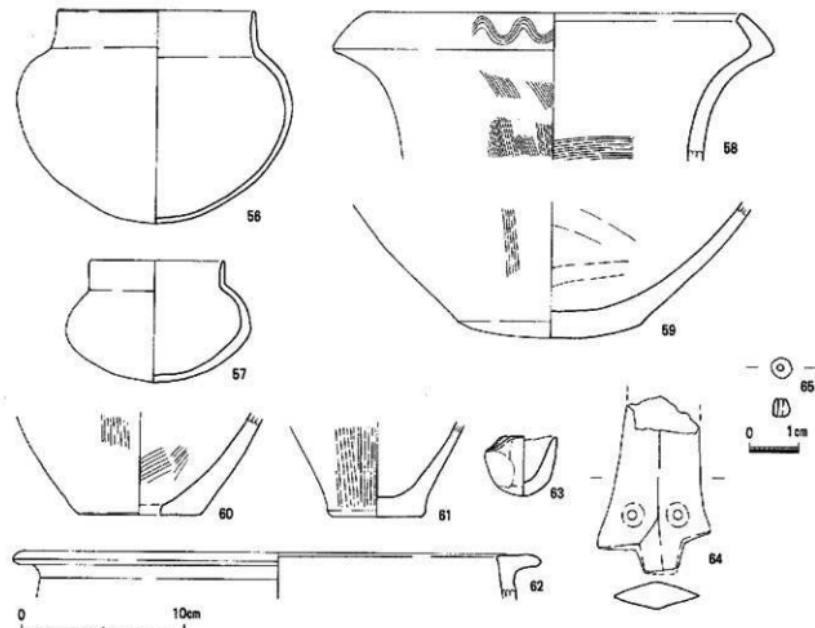


Fig. 27 SC-027出土遺物実測図 (1/3)

の柱穴が住居の主柱穴と考えられる。ベッド状造構は土を持ち込んで貼り床状に作る。この住居に伴う炉床は検出していない。

ベッドは貼り床状に築かれ、ベッドの覆土から石戈が出土しているが、これは住居に伴う時期ではなく、その前代の造構を崩してベッドとして持ち込んだためのものとみられる。

出土遺物 (Fig.27) 56は短頸壺。口径11.9cm、器高13.0cm。頸部は短く直立し、口縁端部は丸く上げる。胴部は球形で肩が張る。風化が進み、調整が判明する部分はない。57は小型丸底壺で、口径8.2cm、器高7.5cm。頸部は短く直立し、端部は丸まる。胴部は扁平な球形を呈する。胴部内外面とも風化により調整は不明。胴部は本来は横方向ミガキとみられる。58は二重口縁壺。口径24.0cm。口縁部は頸部から内側に短く屈曲し、端部は面取りする。口縁部外面にハケ目状の波状文を施しており、頸部外面は縦方向のハケ目で調整する。内面は口縁部から頸部上部はナデ、その下部は横方向のハケ目を施す。59は大型の變形土器の底部。底径10.6cm。底部はレンズ状を呈する。外面に縦方向ハケ目、内面にケズリ痕が残る。60は甌の底部破片とみられ、底部中央には焼成前穿孔がみられる。底径7.4cm。底部は平底で、胴部は内湾しながら立ち上がる。外面には縦方向ハケ目、内面には放射状ハケ目が残る。61は變形土器の底部。底径6.0cm。底部は平底で、胴部は直線的に立ち上がる。胴部外面は縦方向ハケ目、内面と底部はナデ調整。62は弥生中期の變形土器。口径32.4cm。口縁はL字形に外反する。外面とも風化のため調整は不明。63は小型の手捏土器。口径4.3cm、器高3.7cm。内外面全体に指圧痕が残る。64は石戈で、先端部を欠損する。最大幅6.9cm、厚さ1.6cm。全面に丁

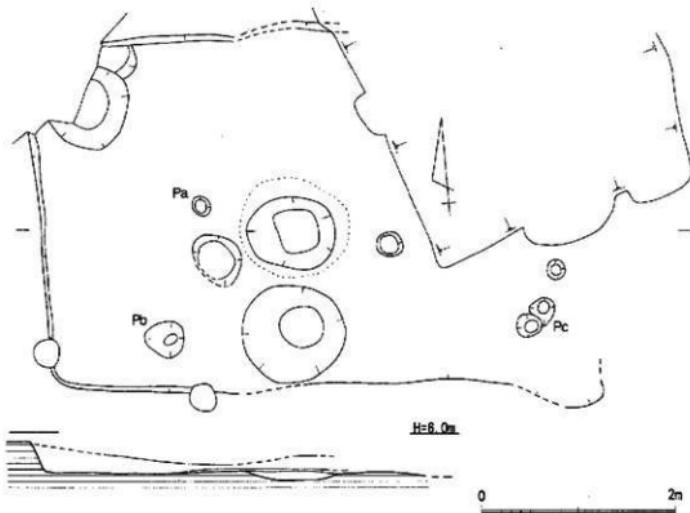


Fig. 28 SC-028遺構実測図 (1/50)

寧な研磨を行っており、刃部も鋭く研ぎ出されており、肉眼観察では刃こぼれや使用痕は見られない。基部付近は鎌の穂が甘くなる。基部の形状も丁寧に形を整えて研磨している。穿孔部分や基部には柄に着装した痕跡は明瞭でない。玄武岩製。65はガラス製の小玉。長さ4mm、直径4mm。上から見ると6角形に近い形で、横方向は歪む。青色～緑色を呈し、透明感をもつ。

SC-028 (Fig.28)

調査区中央で検出された長方形の竪穴住居。SC-009（北）を切っているが、SC-027とSC-030との切り合いについては土質が近似していて区別することができず、前後関係を直接把握することはできなかった。住居の長軸は東西方向を向き、長軸方向の推定長は6m、幅は3.6mを測る。造構面から住居床面までの深さは30cm前後である。住居中央西側に焼土分布域と浅い掘り込みがあり、この部分が炉床と考えられる。主柱穴については確定することができなかったが、SC-006と同様に4本柱と推定すると、図中Pa～cはその有力な候補になるだろう。

出土遺物 (Fig.30) SC-028として取りあげることができた遺物は量的に少なく、また細片が多く図示可能な遺物は少ない。66は小型の変形土器で、口径16.6cm。口縁部は逆L字形に屈曲して外反する。屈曲は緩い。胴部は張り気味に開く。胴部外面に縱方向のハケ目を施す。

SC-030 (Fig.29)

調査区中央で検出された方形の掘方と掘方に伴う北西側の段差を、竪穴住居の一部と認め、SC-030とする。中央の長方形の掘方をベッド状造構に囲まれた部分、南西の段差を住居壁面と考え、東、南、西の三方をベッド状造構で囲まれた方形の竪穴住居と推定できる。掘方の長軸はほぼ南北向き、長さ3.6m、幅2.9m、造構検出面から床面までの深さは30cmを測る。掘方中央に焼土や灰の集中域があり、浅い掘り込みを伴うことから、この部分が炉床とみられる。炉床を挟んでベッド状造構の端部附近に一对の柱穴が位置し、主柱穴を構成すると考えられる。ベッド状造構や住居全体の規模について

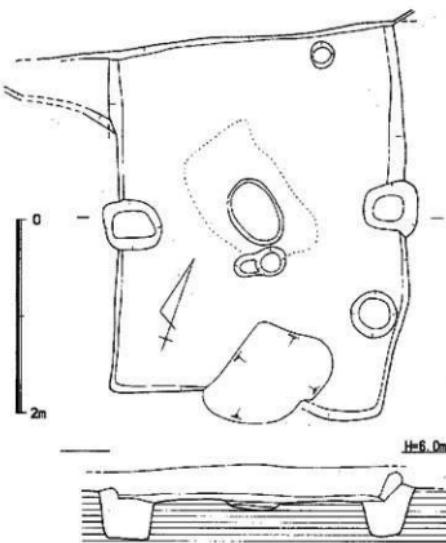


Fig. 29 SC-030遺構実測図 (1/50)

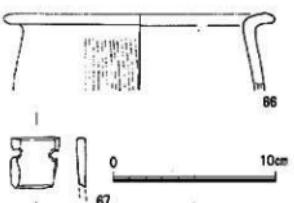


Fig. 30 SC-030出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig. 33) 69は壺形土器。口径27.4cm。口縁部はく字形に外反する。頸部の屈曲は緩く、胴部は丸みを帯びてふくらむ。胴部外面に縦方向のハケ目が遺存しているが、内外面とも風化が進み、調整が不明な箇所が多い。70は弥生時代中期の壺形土器で、遺構の時期に伴うものではなく埋没時に混入したものと考えられる。口径25.2cm。口縁は逆L字形に外側に突出する。口縁内側に横ナデ整形によるわずかな張り出しが見られる。胴部に縦方向のハケ目の痕跡が残るが、器面の大部分は風化のため剥落が進行する。

SK-010 (Fig. 34)

調査区中央で検出した円形の土坑。遺構主軸を北西—南東方向にもつ。平面形は隅丸方形に近い円形を呈し、検出面の東西方向長2.2mを測る。床面は平坦で、床面上にピットなどはない。床面の東西方向長は1.9m、幅1.4m。壁面は床面から開き気味に立ち上がる。

出土遺物 (Fig. 35) 72は須恵器壺蓋。口径14.6cm。口縁端部はわずかに外反し、端部は丸く收める。

は他の住居の切り合いのために確定することはできないが、三方のベッド状構造と2本の主柱穴、中央炉の各要素を備えていたことは確実である。

出土遺物 (Fig. 30) SC-030として取りあげた遺物は床面付近の遺物に限られる。67は石包丁で、持ち手の穿孔部分周辺のみ遺存する。基部は直線的である。砂岩製。

2. 土坑・貯蔵穴 (SK)

SK-007 (Fig. 31)

調査区南東側で検出された土坑で、遺構検出面から遺構床面までの深さは10cm程度と非常に浅い。平面形は長方形を呈していると考えられ、南西側のコーナーがかなり丸味を帯びている。遺構床面は平坦で、ピットが2基位置する。

出土遺物 (Fig. 33) 68は小型丸底壺。口径9.2cm、器高8.4cm。口縁部は外側に開きながら立ち上がる。胸部は扁球形を呈する。内外面とも風化が進み、調整が不明な部分が多い。

SK-008 (Fig. 32)

調査区南西側で検出された、貯蔵穴とみられる方形の土坑。遺構主軸は南北方向にとる。検出面で、南北方向長2.3m、東西方向長2.4mで、床面レベルで南北方向長さ2.2m、東西方向長2.3mを計り、平面形ほぼ正方形である。床面はほぼ平坦で、壁面は床面から垂直に立ち上がる。床面や壁面には柱穴や横穴など、付帯する構築物の痕跡は見られない。

出土遺物 (Fig. 33) 69は壺形土器。口径27.4cm。口縁部はく字形に外反する。頸部の屈曲は緩く、胴部は丸みを帯びてふくらむ。胴部外面に縦方向のハケ目が遺存しているが、内外面とも風化が進み、調整が不明な箇所が多い。70は弥生時代中期の壺形土器で、遺構の時期に伴うものではなく埋没時に混入したものと考えられる。口径25.2cm。口縁は逆L字形に外側に突出する。口縁内側に横ナデ整形によるわずかな張り出しが見られる。胴部に縦方向のハケ目の痕跡が残るが、器面の大部分は風化のため剥落が進行する。

天井部の大部分は欠損しているが、全体に丸い器形と見られる。外面天井部付近は回転ヘラケズリ、口縁部付近と内面は回転横ナデ。73は須恵器坏。口径11.8cm。受け部は内傾しながら高く立ち上がり、坏部は丸く作られる。底部付近は回転ヘラケズリ、坏部体部と受け部は回転横ナデ。74は須恵器坏の形態を模したとみられる土師質の坏。胎土の色調は明褐色で、焼成は軟質で焼きが甘い。口縁は受け部の立ち上がりのように内傾し、端部は横ナデで丸める。受け部は須恵器の坏ほど明瞭な形を為してはおらず、簡単な屈曲で表している。体部は扁平に作っている。受け部が横ナデまたは回転横ナデで成形されている他は、風化が進み、成形、調整の詳細は不明である。SK-014 (Fig.34)

調査区南東側で検出された小型の土坑。平面形は椭円形に近い形で、検出面から床面までの深さは10cm程度で浅い皿状を呈する。長軸方向長1.6m、幅80cm。

出土遺物 (Fig.33) 71は大型の高坏の坏部破片。口径35.8cm。口縁は坏体部から軽く屈曲して外反し、端部は丸まる。風化のため内外面とも剥落が著しく、器面調整は不明。

SK-032 (Fig.36)

調査区北東側で検出された貯蔵穴で、SC-021に重複する。検出面での長軸方向長は1.6m、短軸方向長1.3m。検出面の平面形は椭円形で、長軸を東西方向にとる。床面の平面形は椭円形だが、長軸は北東—南西方向で、検出面の長軸からは若干外れる。床面の長軸方向長は1.7m、短軸方向長1.4m。床面はほぼ平坦で、床面中央にピットが1基位置し、貯蔵穴の機能に伴うものと考えられる。壁面は内傾し、断面形全体は八字形を呈する。検出面から遺構床面までの深さは約80cmだが、本来はさらに深いものだったと考えられる。

出土遺物 (Fig.37) SC-021と重複して位置しているため、弥生時代後期の遺物の混入が著しい。本来の遺構の年代は75の時期に該当すると考えられる。75は弥生前期の變形土器。口径23.8cm。口縁部は如意状に強く外反し、口縁端部には刻目を全面に施す。口縁直下にヘラ書きで沈線文を1条施文する。外面は縦方向ハケ目で口縁部はハケ後横ナデ。内面は口縁部が横方向ハケ目、胴部がナデ。76は變形土器。口縁はく字に屈曲して軽く湾曲しながら外側に開く。胴部は肩が張らず、全体

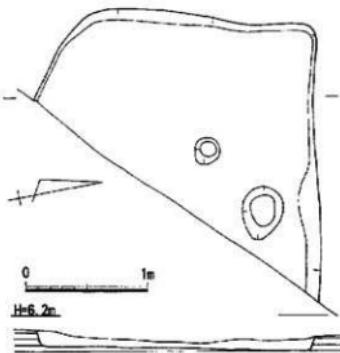


Fig. 31 SK-007遺構実測図 (1/40)

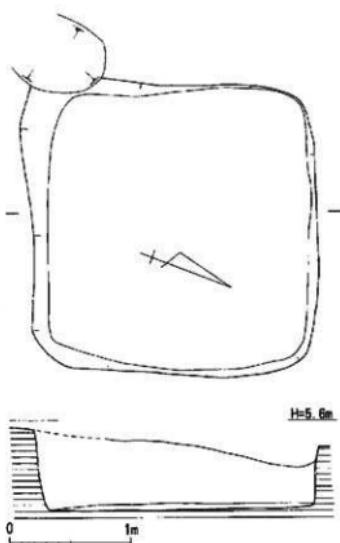


Fig. 32 SK-008遺構実測図 (1/40)

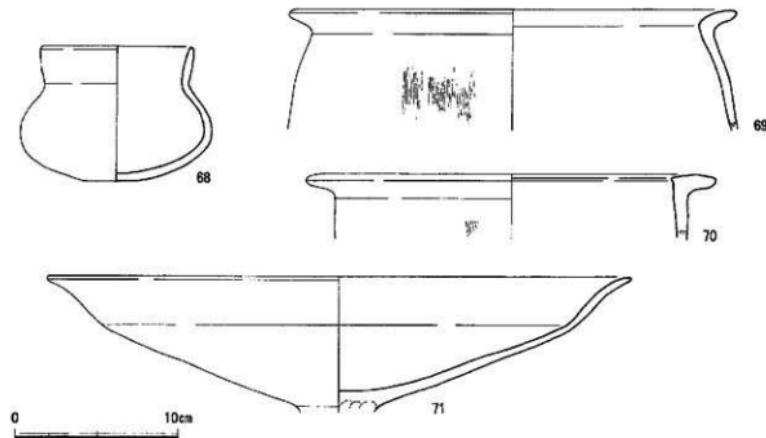


Fig. 33 SK-007・008・014出土遺物実測図 (1/3)

で長胴形を呈すると見られる。風化による摩耗のため内外面とも調整不明。77は筒形器台で、ほぼ完形。口径13.4cm、器高18.0cm、底径14.8cm。口縁部は外側に外反し、端部は面取りする。胴部は縱線的に広がり、脚部は緩く外反する。脚端部も面取りする。調査は口縁外面付近がナデ、調部は縱方向ハケ目、内面は口縁部から胴部にかけてナデ、脚部内面に横ハケ痕跡が残る。

3. 溝状遺構

- SD-001 (Fig.2)

調査区南側で検出した溝状遺構。幅3.5m、検出面からの深さは1.0~1.2mで、屈曲部分が最も深くなってしまっており、東端と南端はほぼ同レベルである。東西方向に延びる溝は、
H=6.0m。調査区内で南側にはほぼ直角にカーブしており、何らかの区画溝のコーナー部分ともみられる。断面形は台形で、床面には細かい凹凸がみられるが、溝床面のレベル差をみると水が流れていったとは考えにくい。溝の機能や正確については明らかにすることは困難で、特に条里方向を全く無視した溝の方向が何を意味しているものか、周辺の調査を待ちたいと思う。

出土遺物 (Fig.38) 78は青磁碗の底部破片。高台径5.6cm。釉は疊付以外の部分に施釉され、釉色は緑色を呈する。見込みに描線で文様を描いているが、釉表面の風化のため、不明瞭である。破片の周囲は打ち欠き状に欠損しており、人為的な打ち欠きの可能性もある。中世に属する遺物であ

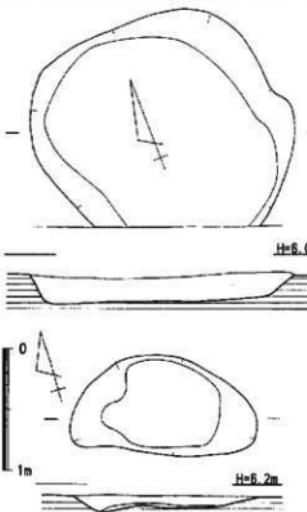


Fig. 34 SK-010・014遺構実測図 (1/40)

る。

SD-002 (Fig.2)

調査区南側で検出した溝状遺構。東西方向に直線的に延びる。溝の方向はSD-001北側とほぼ同一方向で、両者の関連が伺える。幅2m、深さは東側で70cm、西側で90cmを測る。床面レベルは西側が若干低く、東側と西側の床面のレベル差は10cmである。断面形は台形で、溝の南側部分にテラス状の部分がある。溝の床面や壁面には細かい凹凸が目立ち、水が流れていた痕跡とみられる。また溝の覆土は薄灰色粗砂で、覆土土質も流水を示す証左となっている。溝底部から染付碗が出土しており、溝の埋没は近世以降とみられる。近世水田の水引き溝とも考えられるが、周辺の条里方向には全く沿っておらず、明治期の地図にもこの方向の溝や道路などの区画線は周辺を含め見あたらぬ。SD-001と合わせて今後の検討課題である。

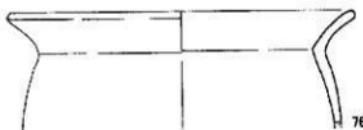
出土遺物 (Fig.38) 79は染付の碗で、高台部分を欠く。口径10.0cm。口縁から部が直線的に開きながら立ち上がり、見込み部分は平坦な、近世・肥前系の碗である。外面には草花分を描き、内面口縁部付近には平行線を描く。

SD-020 (Fig.1)

調査区北側で検出した溝状遺構で、SE-029付近を基点とし、わずかに左方向に曲がりながら西方向に延びる。溝幅は50~80cmで、深さは調査区西壁付近で80cmで、溝床面のレベルは西に向かって傾斜していく。床面や底面には細かい凹凸が残るが、これが流水の結果によるものかどうかは明確ではない。覆土も黒褐色の粘質土を主体としていて、砂質土は堆積していないため、直接水が流れている様相はみられない。遺構の時期は出土遺物や、溝自体がSC-019を切っていることから



75



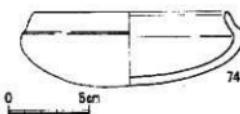
76



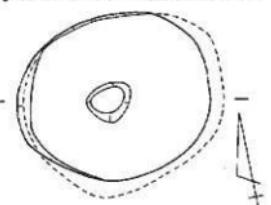
72



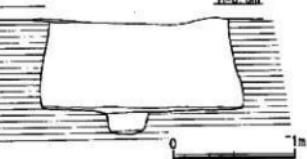
73



74

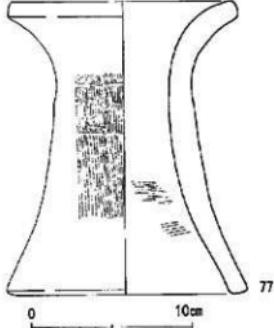


H=6.5m



0 1m

Fig. 36 SK-032遺構実測図 (1/40)



10cm

Fig. 37 SK-032出土遺物実測図 (1/3)

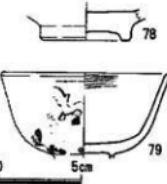


Fig. 38 SD-001・002
出土遺物実測図 (1/3)

みて、古墳時代前半代に属すると見られる。出土遺物の時期がSE-029とほぼ同じであるため、両者の有機的な関連性が伺える。

出土遺物 (Fig.39) 80は壺形土器。口径13.8cm。口縁部は外湾し、端部は丸める。胴部は長胴気味にふくらむ。胴部外面は縦方向のハケ目で、内面は口縁部が横方向のハケ目、胴部上位がナデ、下部で縦方向のケズリがみられる。81は壺形土器ではほぼ完形に復元できる。口径18.0cm、器高35.1cm。口縁部は外湾し、端部は丸める。胴部は肩が張り倒卵形を呈する。胴部外面は縦方向ハケ目で、底部付近に横方向の平行タタキ目が残る。内面下部にはケズリ痕が残る。風化のため磨耗が進み、調整が不明な部分が多い。82は壺形土器だが、壺形土器の可能性もある。口径16.0cm。口縁端部は丸める。頭部の屈曲は甘い。内外面共に風化が進み、調整は不明。83は壺形土器。口径19.8cm。口縁部は頭部から緩く屈曲し、端部は現況では丸まる。頭部は細く締まとるとみられる。内外面とも風化のため調整不明。84は無頭壺の口縁部。口径12.0cm。口縁部は直立し、口縁端部は横ナデで面取りする。口縁直下に断面三角形突帯を1条貼付している。内外面ともに風化により調整は不明だが、丹塗り痕が内面、外面両方に確認できる。85は壺形土器。口径17.0cm。口縁部は直線的に開き、口縁端部は現状では丸まる。頭部の屈曲は明瞭である。胴部外面の一部にハケ目が残り、内面にケズリ痕が残るが、内外面とも風化が著しく、器面調整は大部分不明。86は壺形土器。口径17.2cm。口縁部はく字形に屈曲して外側に開き、端部は横ナデで面取りする。胴部は横に張らず、全体に長胴形とみられる。外面は口縁から胴部にかけて縦方向のハケ目、内面口縁部付近に横方向ハケ目を施し、胴部内面はナデ。87は小型の壺形土器。口径10.2cm。口縁は短く外反し、胴部は扁球形を呈する。口縁部付近はナデ、胴部内面には蜘蛛の巣状ハケ目の痕跡が残る。胴部外面は器壁表面が荒れ、調整不明。88は高壺の口縁部付近で口径18.6cm。口縁部は壺体部から外湾気味に立ち上がり、端部は丸める。屈曲部に下方に垂下する突起状の作り出しがあるが、粘土貼付によるものではなく、壁体を折り曲げて成形している。器面調整は口縁部外面が横方向のナデまたはミガキ、内面はナデで、体部外面は風化による剥落が目立ち、調整不明。89は高壺の脚部破片。底径11.6cm。脚部は接合部付近から直線的に強く開き、八字形を呈する。脚端部は丸まる。脚部中位に円形の穿孔があり、復元すると全部で3ヶ所穿孔されていたと考えられる。内外面とも風化による表面の剥落が著しく、器面調整は不明。90は紡錘形の投弾である。全長4.3cm、径2.4~2.6cm。全体に指ナデで成形している。

4. 井戸 (SE)

SE-029 (Fig.40)

調査区北東側で検出した井戸で、上端の一部は調査区外に及ぶ。造構断面形は、造構上部は鉢柱状で壁面の傾斜は緩く、下部は筒状を呈し、壁面の傾斜はほぼ垂直に近く、一部はオーバーハングの様相も呈する。この両者の掘削状況の差は、二段階の掘削によるものであることを伺わせる。検出面での上端平面形は円形に近い不整形を呈し、径2.6m前後を測る。造構下部の筒状の部分は平面形が長方形に近い梢円形を呈し、上端で長径1.9m、短径1.4m、床面で長径1.4m、短径90cmを測る。床面のレベルは標高3.7mで高めと考えられるが、標高4.5m付近以下で激しく湧水することから、井戸としての機能を維持することは可能であったと考えられる。覆土内から人頭大の石材が数点出土したが、井戸枠の石組みと考えるには量があまりにも少なく、また造構壁面にも石を組んだ痕跡が無いことから、素堀の井戸とみられる。

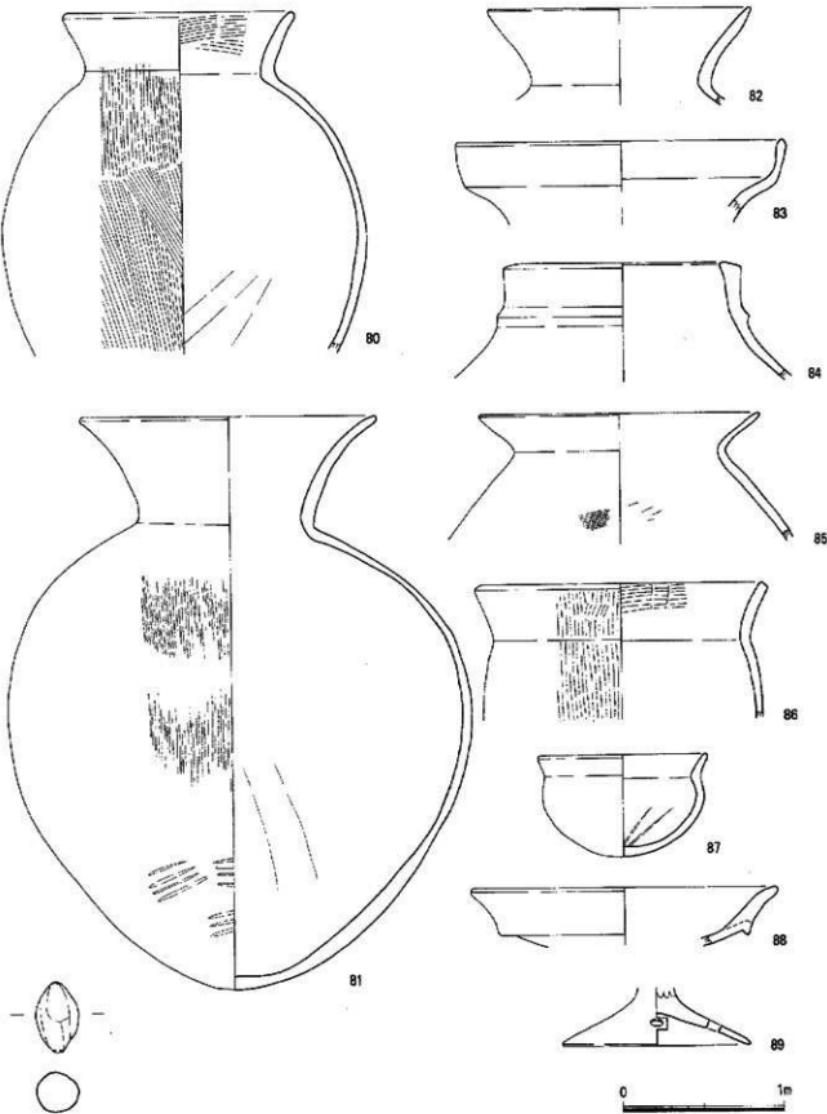


Fig. 39 SD-020出土遺物実測図 (1/3)

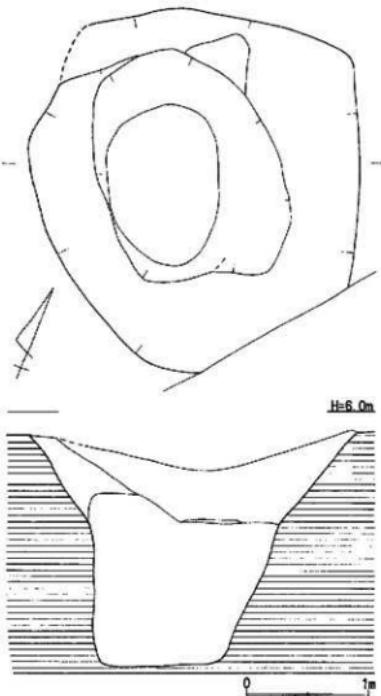


Fig. 40 SE-029遺構実測図 (1/40)

耗して不明瞭で図示不能。頸部外面に4条の縦方向の条痕が伺えるが、不明瞭で図示不能。胴部下部は風化が進み、調整は不明。内面は頸部が横方向ミガキ、胴部内面が横方向～縦方向のハケ目で、頸部境界付近に粘土接合時の指圧痕が残る。全体に風化、磨耗が進む。95は壺形土器。口径16.6cm、器高31.8cm。頸部は胴部から明瞭に屈曲して外湾しながら立ち上がり、頸部の厚さが比較的厚い。口縁端部は丸めて仕上げる。胴部は球形で最大径は胴部中位より上に位置する。底部付近は現況で穿孔状に欠損しているが、これは調査時の欠損である。器面調整は、頸部外面が縦方向ハケ目、胴部中位以上は縦方向の短いハケ目、底部付近は縦方向のケズリ。内面は頸部が横ナデ、胴部上位は横ハケ、胴部下位はケズリ。内面の頸部と胴部の境界に粘土接合痕と指圧痕が残る。96は小型の壺形土器。口径11.3cm、器高17.3cm。口縁は外側に短く開き、口縁端部は丸く仕上げる。胴部は横に張る。器面調整は口縁部が横ナデ、胴部には縦方向ハケ目の痕跡が残る。内面は口縁部が横ナデ、胴部が縦方向のケズリ。風化が進み、外面の磨耗が著しい。97は小型丸底壺、口径12.0cm。風化が進み、全体に器壁の剥落が著しいが、全体は本来から薄手のつくりだったと考えられる。口縁部はわずかに内湾しながら外側に開き、胴部は球形を呈する。風化のため、内面に横ミガキまたはハケ目とみられる痕跡がわずかに残るだけである。98は小型の壺形

出土遺物 (Fig. 41～43) 91は大型の二重口縁壺。口径42.0cm。頸部は強く外反し、口縁端部は横ナデで面取りし、端部内側は短く立ち上がる。頸部と胴部の境界に断面三角形突帯を貼付している。胴部は球形を呈する。風化が著しく、器面調整は不明。92は壺形土器。口径21.0cm、器高18.8cm。頸部は外反し、端部付近で外湾する。口縁端部は丸める。頸部と胴部の境界に断面三角形の突帯を1条貼付しており、胴部は球形を呈する。頸部外面は横ナデ又はミガキで調整され、胴部外面には左上方向のハケ目が残る。頸部内面も横ナデ又はミガキ、胴部内面は縦ハケで指圧痕が多く残る。風化が進み、表面や破断面の磨耗が著しい。93は完形で出土した壺形土器。口径16.0cm、器高23.7cm。口縁部は短く外反し、端部は丸く仕上げる。胴部は倒卵形を呈する。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部上面は横方向平行タタキ、下部は横方向平行タタキの上から縦方向ハケ。内面はナデで、縦方向の条痕があり、工具の痕跡と考えられる。

94は壺形土器。口径17.8cm、器高34.8cm。口縁部は外反し、端部は丸める。胴部は球形で最大径は胴部中央に位置する。頸部外面は縦ハケ後横ミガキを行うが、ミガキ痕跡は磨耗して不明瞭で図示不能。頸部外面に4条の縦方向の条痕が刻まれている。胴部外面は肩部に横方向のミガキ痕跡が伺えるが、不明瞭で図示不能。内面は頸部が横方向ミガキ、胴部内面が横方向～縦方向のハケ目で、頸部境界付近に粘土接合時の指圧痕が残る。全体に風化、磨耗が進む。95は壺形土器。口径16.6cm、器高31.8cm。頸部は胴部から明瞭に屈曲して外湾しながら立ち上がり、頸部の厚さが比較的厚い。口縁端部は丸めて仕上げる。胴部は球形で最大径は胴部中位より上に位置する。底部付近は現況で穿孔状に欠損しているが、これは調査時の欠損である。器面調整は、頸部外面が縦方向ハケ目、胴部中位以上は縦方向の短いハケ目、底部付近は縦方向のケズリ。内面は頸部が横ナデ、胴部上位は横ハケ、胴部下位はケズリ。内面の頸部と胴部の境界に粘土接合痕と指圧痕が残る。96は小型の壺形土器。口径11.3cm、器高17.3cm。口縁は外側に短く開き、口縁端部は丸く仕上げる。胴部は横に張る。器面調整は口縁部が横ナデ、胴部には縦方向ハケ目の痕跡が残る。内面は口縁部が横ナデ、胴部が縦方向のケズリ。風化が進み、外面の磨耗が著しい。97は小型丸底壺、口径12.0cm。風化が進み、全体に器壁の剥落が著しいが、全体は本来から薄手のつくりだったと考えられる。口縁部はわずかに内湾ながら外側に開き、胴部は球形を呈する。風化のため、内面に横ミガキまたはハケ目とみられる痕跡がわずかに残るだけである。98は小型の壺形

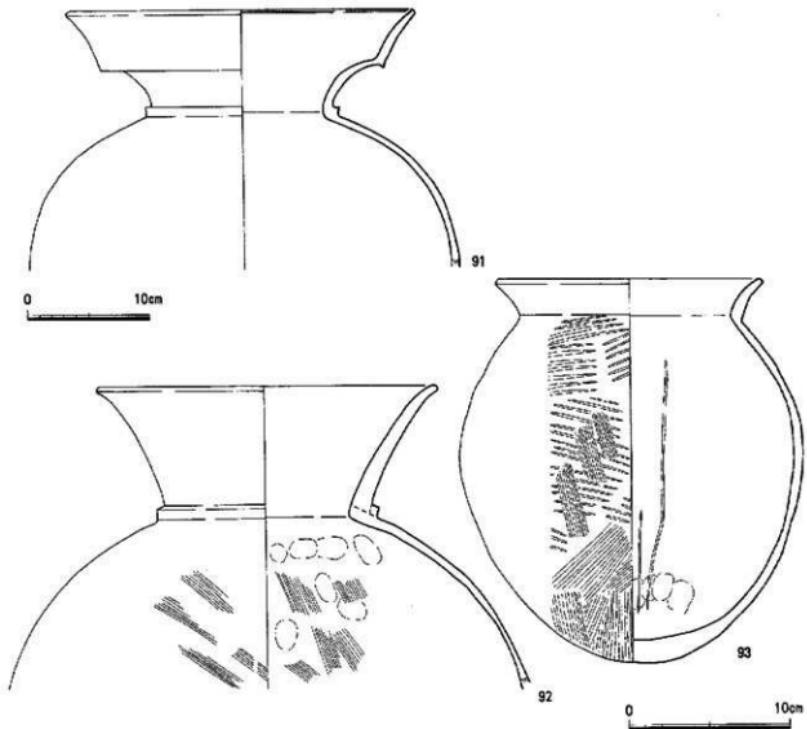
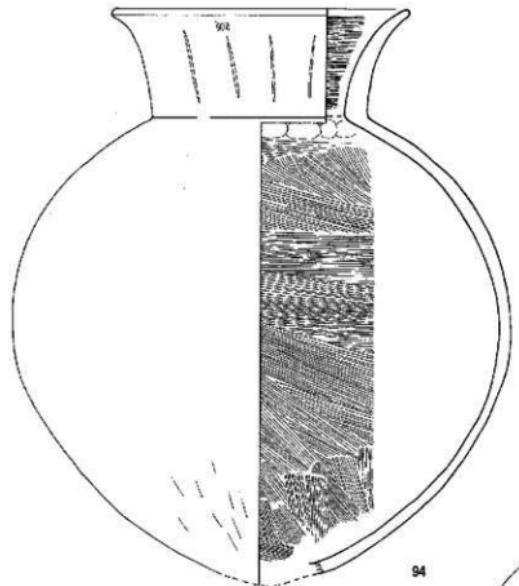
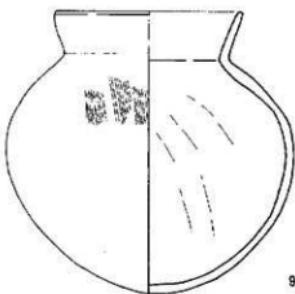


Fig. 41 SE-029出土実測図1 (1/3・91は1/4)

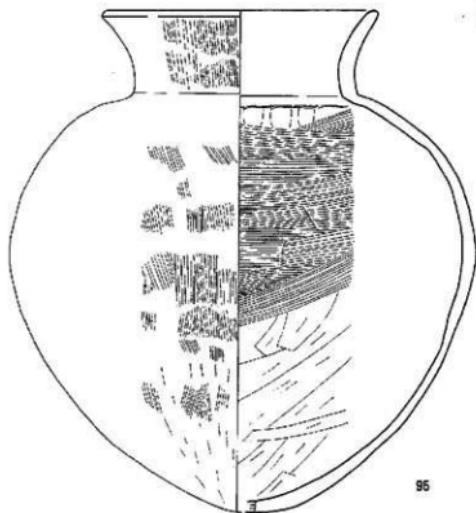
土器で、口径12.4cm。口縁は直線的に外反し、端部は丸める。外面は横ナデ、内面はナデ。内外ともに風化が進み、器面の剥落が著しい。99は小型の壺形土器で、口径12.8cm。口縁は直線的に外反し、端部は丸める。頸部の屈曲は緩い。全体に風化が進み、内外面とも調整は不明。100は壺形土器。口径13.6cm。口縁部はわずかに内湾曲し、口縁端部は面取りする。風化が進み、調整が判明する部分はない。101は壺形土器の口縁部から頸部の破片。口径16.4cm。口縁部は内湾しながら開き、口縁端部は面取りして端部内側を上方に跳ね上げる。頸部の屈曲は緩い。器面調整は、外面が横ナデ、内面は頸部が横ナデ、胴部が横方向のケズリ。102は壺形土器で、口径19.8cm。口縁部は外反し、端部は面取りして端部内側を上方に跳ね上げる。頸部の屈曲は甘い。口縁部外面から頸部外面は横ナデ、胴部は肩部が左上方向ハケ目、中位が横方向ハケ目で調整する。内面は口縁部が横ナデ、胴部は左上方向ケズリで、成形時の縱方向の指圧痕が残る。103は古墳初頭の壺形土器で、口径18.0cm。口縁部は外側に直線的に開き、頸部の屈曲は甘い。内外面とも風化が著しく、剥落が進み、調整不明。104は壺形土器で口径19.6cm。口縁は短く外側に開き、端部は内側に跳ね上げる。外面は横ナデ調整、内面は頸部が横ナデ、胴部はケズリ。風化が進み、全体に軟質化して磨耗が進む。105は弥生時代中期の壺形土器。本来の造構の時期に伴うものではなく、埋没時の流れ込みによるものである。口径



94



96



95



Fig. 42 SE-029出土遺物実測図2 (1/3)

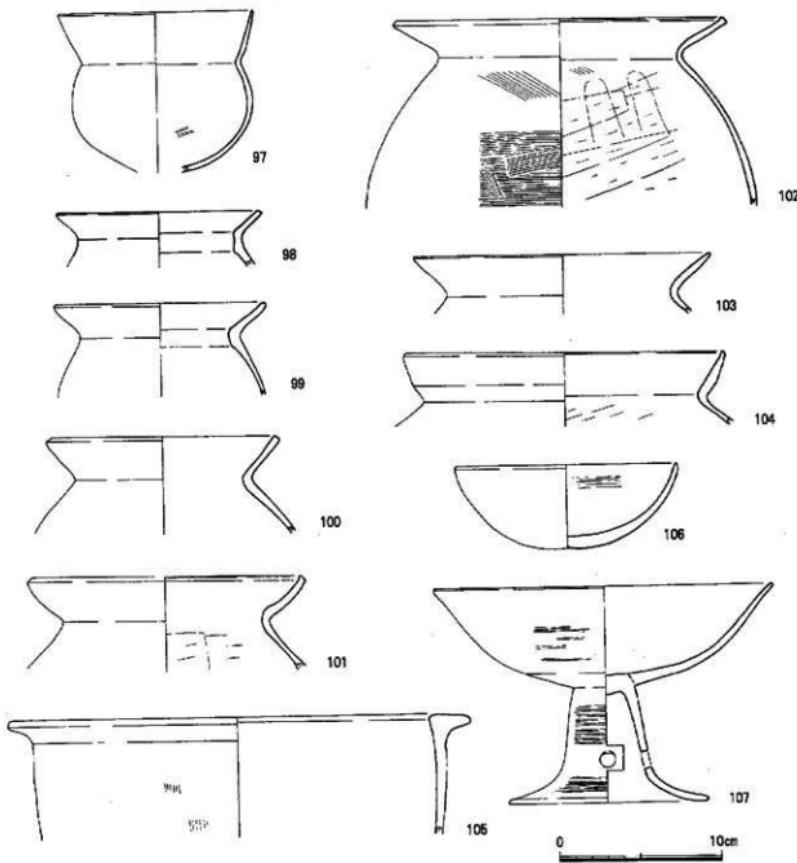


Fig. 43 SE-029出土遺物実測図3 (1/3)

28.4cm。口縁はL字形に外側に突出する。胴部は匏弾形とみられ、器面調整は、口縁部付近は横ナデ、胴部外面には縦方向のハケ目が残り、内面はナデ。106は鉢形土器で口径13.4cm、器高5.2cm。半球形を呈し、口縁端部は丸めて仕上げる。底部に平坦面の部分がある。外面は風化のため調整不明。内面の一部に横方向のハケ目が残る。107は井戸下層で出土した高坏で、図上で完形に復元できた。口径20.8cm、器高13.3cm、底径12.2cm。坏部は直線的に外側に開き、底部と坏部の境界の屈曲は緩い。脚部は下部が開き気味の台形の柱部から脚端部が強く開く形で、端部は丸く仕上げる。脚部中央に背面方向の一対の円形の穿孔を施す。器面調整は、坏部外面の一部に横方向のミガキ痕跡が残り、脚部外面にも横方向のミガキ痕跡が見られる。内面は坏部が磨耗のため調整不明、脚部も剥落が著しく、調整は不明。全体に器面や破断面の磨耗、剥落が目立つ。

第3章 小結

竪穴住居の変遷について 今回の調査ではあわせて15基の竪穴住居を検出している。切り合いが激しく、遺存状態が悪い竪穴住居もあるため、全ての竪穴住居について詳細が判明しているわけではないが、現時点で判明又は推測可能な住居について検討を加えたい。

住居は形態的に大きく3つに分類可能である。

- (1) 平面形が横長の長方形で、内部にベッド状遺構を持たないもの。主柱穴は4本と推定される。(SC-006・028など)
- (2) 平面形は正方形に近いとみられる。壁溝は太く明瞭で、ベッド状遺構は検出されない。中央に炉をもつ可能性が高い。(SC-004・019・021・023・024・027など。SC-030もこの形態とみられる。)

(3) 平面形が正方形に近い長方形で、住居内部に2面または3面のベッド状遺構を付設する。床面中央に炉を設置する。主柱穴は2本とみられる。(SC-005など。SC-003もこの形態とみられる。)

この1～3までの住居を検出時の切り合いから検討すると、時期的に新しい順に1から3に並ぶ。1の形態の住居からは須恵器破片が出土することから、古墳時代中期以降の住居である可能性が高い。また3の形態の住居は古墳時代初頭の井戸や溝(SE-020・SE-029)に切られており、弥生時代後期に属するものと考えられる。2の形態の住居については、その中間期、すなわち弥生時代終末期に比定しておきたい。

SD-020とSE-029について 調査区北側で検出した溝SD-020と井戸SE-029はいずれも出土遺物から古墳時代初頭に属する遺構と考えられる。この2つの遺構は位置的に近い場所に位置し、またSD-020は井戸西側を起点として西側に傾斜しており、井戸から西に向かって流れる水路であることを妥協に推測してしまう。ただ、SE-029から水を人力で汲み上げ、SD-020を通じて台地上に行き渡らせるることは現実的には想定困難であり、大量の水をSD-020に流そうとするならSE-029が自噴井戸でなければ無理であろう。この両者が機能的に関連するのかどうかについてはSD-020の西側での状況が明らかになることが必要で、そのためには本次調査区周辺のさらなる調査が待たれる。

なお、溝SD-001・002の性格・機能についても本調査区内では明らかにすることはできない。上と同様に周辺地区の調査結果により決定されると考える。

図版1



(1) SC-003 (西から)



(2) SC-004 (北から)



(3) SC-005 (南から)

図版 2



(1) 調査区西半全景（南から）



(2) SC-006（南から）



(1) 調査区東半全景（南から）



(2) SC-018（南から）

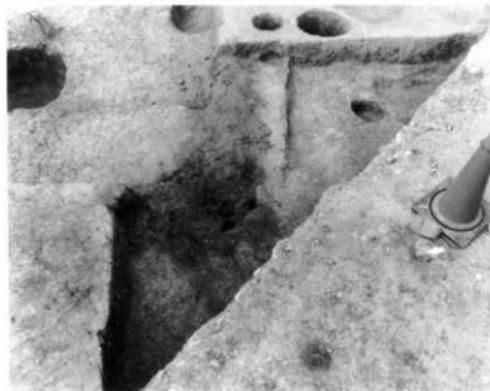
図版 4



(1) SC-019 (南から)



(2) SC-021 (南から)



(3) SC-023 (南から)

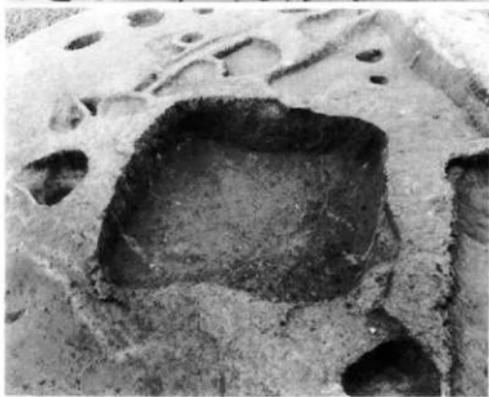
図版5



(1) SC-024 (南から)



(2) SC-030付近 (南から)



(3) SK-007 (西から)

図版 6



(1) SK-010 (東から)



(2) SK-032 (南から)



(3) SD-020 (南から)



(1) SE-029土器出土状況1（北東から）



(2) SE-029土器出土状況2（南東から）



(3) SE-029完掘状況（南東から）

図版 8



33



81



93



94



95



96

報告書抄録

ふりがな	さんのういせき 3					
書名	山王遺跡 3					
副書名	第4次調査報告書					
巻次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第931集					
編著者名	大槻紀宣					
編集機関	福岡市教育委員会					
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号					
発行年月日	平成19年3月30日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)
山王遺跡	ふくおかし 福岡市博多区 山王2丁目37番地	40132 020128	33° 34' 49"	130° 25' 03"	2006.2.15 ～2006.3.31	449.3m ²
調査原因	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
共同住宅建築	集落	弥生時代～ 古墳時代	竪穴住居15、貯蔵穴2、井戸1、 土坑3、溝4、ピット・柱穴5	弥生土器・土師器・ 須恵器・石器・玉類		
要約	<p>遺構は現地表から30～50cm下で、弥生時代～古墳時代の竪穴住居、古墳時代の井戸、溝状遺構、 弥生時代前期の貯蔵穴を検出した。竪穴住居は遺存状況が良好で、遺構面から床面まで30～40cm程度 遺存する遺構もある。住居は方形と長方形の2種類に大別でき、出土遺物や切り合い関係からみて 長方形の住居は方形のものより後出することが判明する。方形の住居はベッド状遺構を持つもの が多く、中央に炉や焼土が明顯に残る住居が多い。また長方形の住居も中央に炉をもつ。方形の住 居からは弥生後期の遺物が大破片で出土する。長方形の住居からは大型の土器片は出土しないが、 須恵器破片が検出される。井戸概方は検出面上端で径2.8mを測る。検出面から井戸底までの深さは 1.8mで、井戸下部は八女粘土まで達し、底面からは現在でも雨水がみられる。井戸底部付近から古 墳初頭の壺形土器などが洗浄形で出土する。溝状遺構は主な溝が3本でうち2本は中世～近世に属す る。1本は古墳初頭で、先述の井戸を起点として西に枝分する。若蔵穴は方形1基、円形1基を検 出し、時期は弥生時代後半とみられる。</p> <p>遺構の時期は弥生時代後期から古墳時代初期まで継続している。遺構の質・密度は西側の比高。 那珂遺跡と大差なく、本来は一体の遺跡群だった可能性が高い。</p>					

山王遺跡 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第931集

2007年（平成19年）3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 有限会社 アイオービジコン
福岡市南区柳原2-3-5

